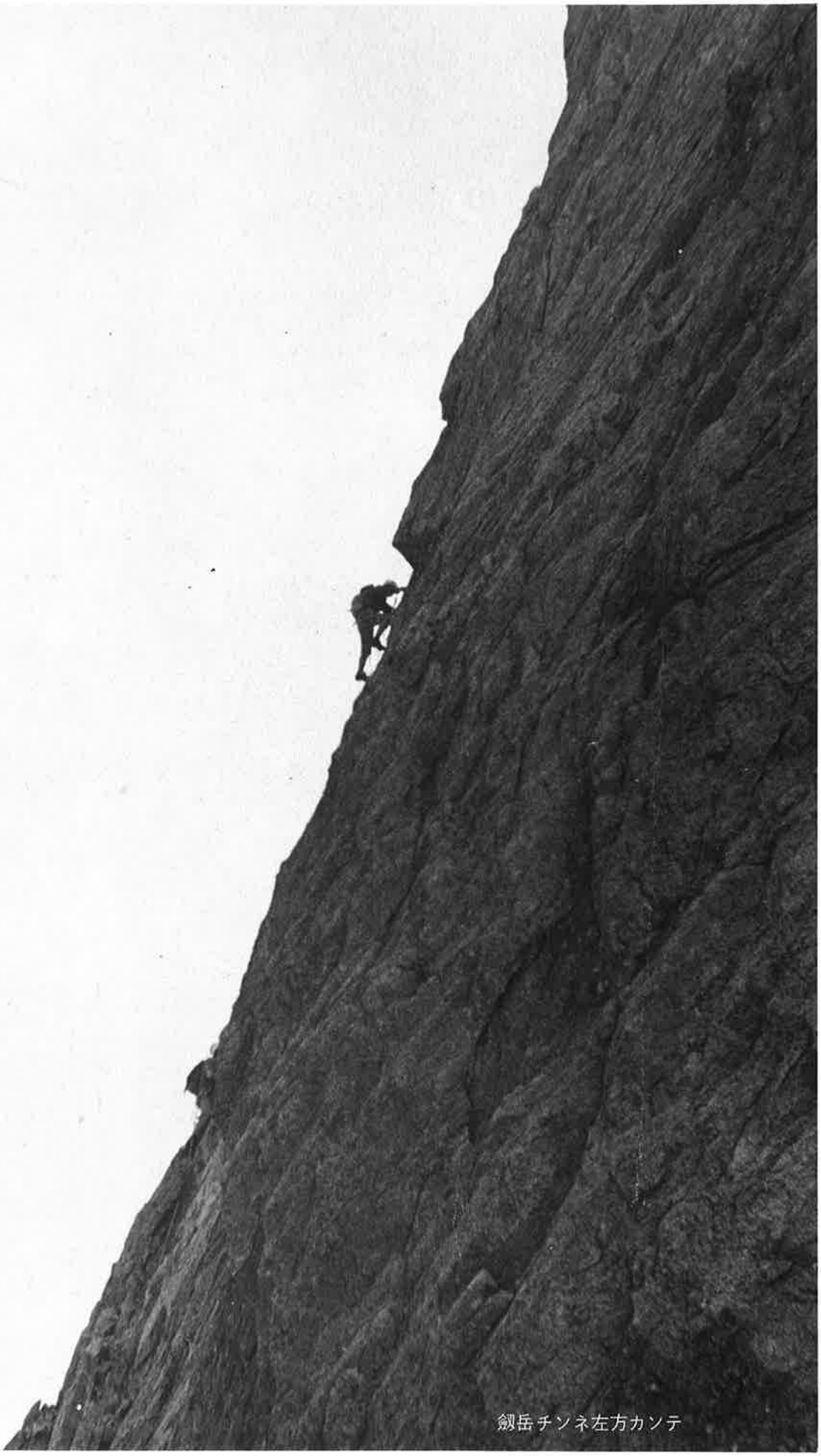
報告

創刊号

大阪外国語大学山岳部



剱岳チンネ左方カンテ

厳冬の五竜岳

剱岳長次郎谷

穂高岳滝谷

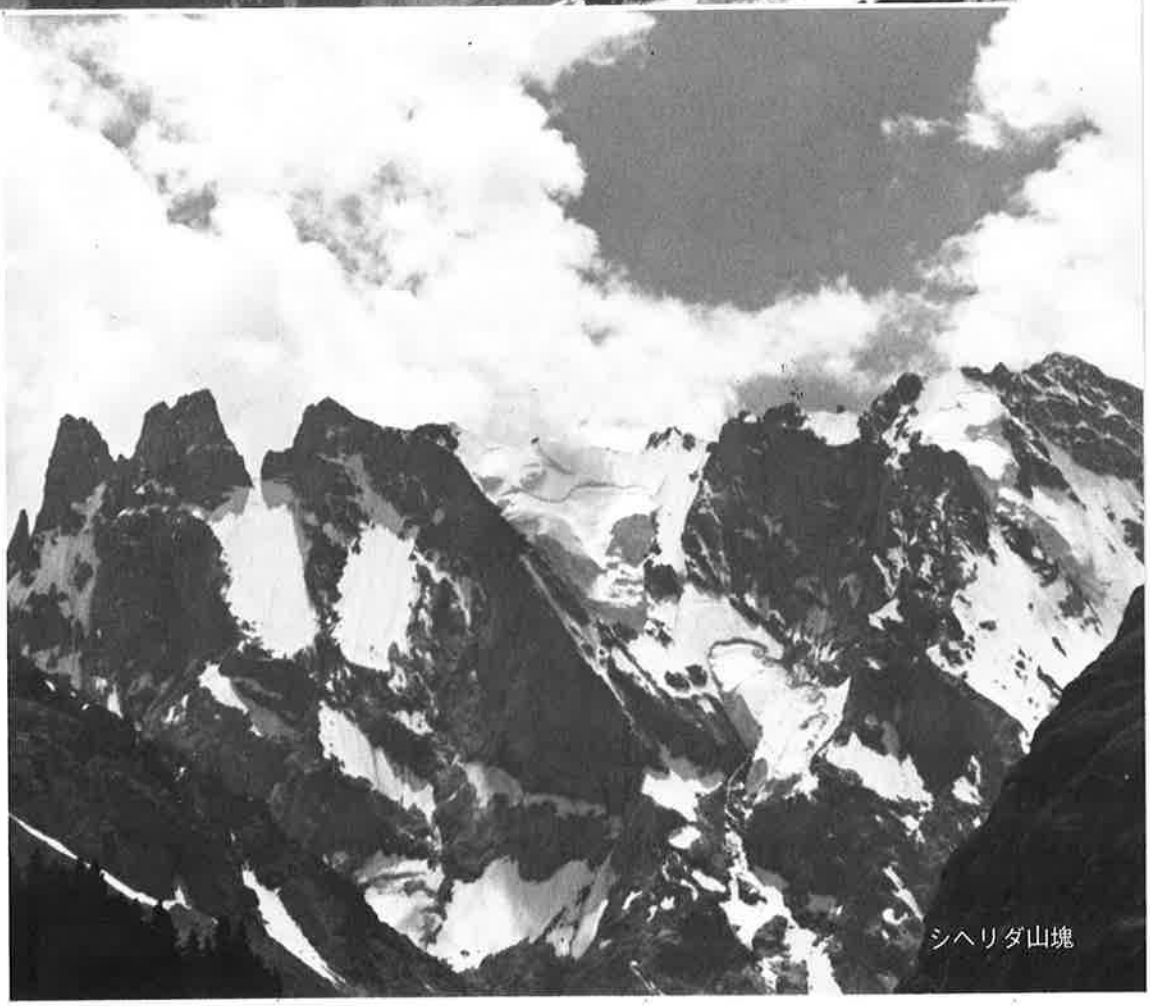
横尾尾根

屏風岩東稜

コーナボン・コルよりダウラギリ山群を望む

ダウラギリ主峰

ウシバ


シヘリダ山塊

報告

あ　い　さ　つ

大阪外国語大学山岳部部長　　丸　山　　忠　雄

昨年１１月１１日にわが大阪外国語大学は創立５０周年を迎えたのでありますが、丁度、それはわれわれ山岳部の再建１５周年の年にあたるわけで、部報創刊号をこの記念すべきときに発行出来たことを皆様と共に慶びたいと思います。部の過去と現在の全貌がこの報告書に殆んど完全に再現されているのですから、読者は、それぞれに、自他の山行についての思索を飛翔させるための跳躍台として、折に触れて本書を手にして下さるならば、それによって大阪外語大山岳部を中心とするわれわれの将来の活動の目指す方向も一層多方面に、一層深くなってゆくものであると考えます。

おわりに本書発刊にあたって物心両面にわたって御援助、御協力いただいた皆様に厚く感謝の意を表します。

目　　次

あいさつ …… 部長　丸山　忠雄　（　3）

挨拶と回顧と希望と …… 畠中　敏郎　（　6）
山岳部再建の経緯 …… 高橋　洵　（　9）
戦前の外語山岳部のこと …… 白井　正　（　12）
我が旅行部時代 …… 平井　典嗣　（　13）

村上泉君・坂東寛彦君追悼
村上泉君略歴 ……（　19）
うんちゃんへ …… 村上東栂枝　（　20）
村上泉君を失って …… 坂東　寛彦　（　22）
山に寄せて …… 荒川　征也　（　23）
村上泉君のこと …… 伊藤　敏雄　（　25）
遭難報告 ……（　26）
遭難碑建立報告 ……（　28）

坂東寛彦君略歴 ……（　19）
寛彦の思い出 …… 坂東　久平　（　31）
思い出の記 …… 坂東永記子　（　32）
泉のように思っていた坂東さん …… 村上東栂枝　（　36）
遭難対策基金について ……（　37）

亡き友をしのぶ …… 広瀬　州男　（　38）
坂東君・村上君のこと …… 林　茂一　（　39）

記録 ……（　41）
1957年度～1971年度

エッセー
※　※　※ …… 奥田　邦治　（153）
自分の山 …… 西前　四郎　（153）

初めての山 …… 奥田　邦治　（１５４）
夏山 …… 西前　四郎　（１５５）
新雪の鹿島槍で …… 橋本　博之　（１５６）
初雪 …… 田村　俊介　（１５８）

編集子への手紙 …… 村上東栂枝　（１６１）
小谷温泉だより …… 丸山　忠雄　（１６２）
遠きて近き山の友 …… 加藤多嘉志　（１６３）
Ａｔ　Ｈｏｕｓｔｏｎ …… 坂田　愃　（１６３）
ロスアンゼルスより …… 橋本　博之　（１６５）
山行雑録 …… 広瀬　州男　（１６６）
針の木の小屋にいた時 …… 百瀬　泰　（１６８）
ＴさんとＭさんと …… 蓮川　博凡　（１６９）
ある体験 …… 山田　昭一　（１７０）
山男の論理 …… 船井　総一　（１７２）
山と私 …… 中西　直文　（１７３）
大窓ビバーク行 …… 吉田　隆三　（１７５）
岩登り …… 水谷　温　（１７６）
自己流 …… 小林　俊人　（１７７）
遭難的登山観 …… 船井　総一　（１７９）

海外の山

冬のマッキンレー登山 …… 西前　四郎　（１８７）
カフカズ散策 …… 田村　俊介　（１９１）

大阪外国語学校山岳部「部報」抜萃 …… （２０１）

名簿 …… （２０８）
編集後記 …… （２１３）

挨拶と回顧と希望と

前部長　畠中敏郎

私は本年三月末をもって大阪外国語大学を六十五歳で定年退官し、同時に昭和三十九年以来の山岳部長の任をも、丸山忠雄教授に肩代りしていただくこととなった。顧みて、この間にさしたる貢献をなし得なかったのは面目ないが、また、部に小さな事故は二三あり負傷者をも出したけれども、さしたる大事のなかったのは嬉しい。その私のためにも送別の会が催され、部の先輩の皆さんからイタリア製の山靴、広瀬州男君から京都北山の額、在学部員諸君から活動記録の写真帖、が贈られたことは、身にあまって難有い。後二者は宅に飾り、前者は将来の山歩きに備えて履きこころみている。ともに心からの一礼をそれぞれの人々に申し上げる。

私は本学の前々身である大阪外国語学校の第三回卒業で、三年間であったその課程の学生が、始めて揃った時の入学である。四年あまり京都帝大（現京大）に勤めて、昭和六年六月に母校へ帰り、以後、十九年夏から二十五年春まで外へ出ていた期間を除いて、戦前、戦中、戦後三十五年の勤めとなった。在職中にも、乞われて昔の本学の事を話したり書いたりしたが、学校を去った今、挨拶のついでに、少々長くはなるが、記憶を辿って山岳部の沿革を述べてみる。古い方々には思い出に、新しい人々には何かの参考にもなるなら幸である。

大正十一年に大阪外語が開校してから、永い間、旅行部というものは校友会に存在したが、山岳部はなかった。当時の校友会雑誌「咲耶」――「浪華津に咲くやこの花……」の和歌からとった名――の末尾に、かなりのページを占める各部の報告によっても、この旅行部は山歩きもしたが、乗物を利用しての普通の旅行もやり、始めのころには随分多面的に、かつ日本全国いろいろな所への計画と実施とのあったことが解る。外国へは勿論、国内でも、今のようには誰でも簡単には行かなかった、あるいは行けなかった時代である。なお、これは学校全体の行事であったが、第一回第二回の人々は、夏休みに上海への修学旅行をした。当時の上海は今日のそれと異り、東洋切っての自由港で、大国際都市であり、また日本からの渡航が容易であったので、専攻語の如何を問わず、一番近い共通の外国として学生の行くのに手頃であるとして、初代校長の中目覚先生（博言学者で視野の広い人であった）が特にこの旅行を提唱せられたらしい。しかし、私ども第三回生からはこの行事はなくなり、先輩の話に聞いて残念がったものである。なおまた、支那蒙古、露の各語部（今日の中国、モンゴル、ロシア各語科）などの学生は、その後の日支事変ころまで、満洲、蒙古、北支中支などへよく夏休みに出かけ、言葉の練習や生活の体験をし、現地

にいる先輩たちの世話にもなり、迷惑も掛けた。そういう時代だけに、前述のような旅行部の存在も意義があったわけで、つまり山岳、ヴアンダーフォーゲル、自動車、探険などというような今日の外大内外の部を、ひとまとめにしたようなものであったわけである。

しかし、初期を過ぎると、旅行部は次第に山行一本になって、山岳部といってよいさまとなった。その時代に貢献した学生諸君は、同窓会名簿などを繰ってみないと一々は挙げられない。ただ、仏語部昭和十年三月卒の真野太一郎君、一年後輩の同じ語部平井典嗣君（この人は最近の日本航空のインドにおいての墜落事故で亡くなった）、さらに一年後の露語部の出で現部長の丸山教授などはその中に入る。教官側では、現在西南学院大におられる法律学の白井正氏を第一とし、戦後早々まで中国語科の主任であった故吉野美弥雄氏、それに私などで、後に今の牧学長の二代前の学長になった森沢三郎氏（英語学）も、同氏が旅行部に関係を持った短い期間に、一度だけ中部山岳行に参加したことがある。私が二度目の剣岳行で足を折ったのもその頃だ。しかしこの時代は、中部の高山へは夏だけ、それもたいてい縦走であり、他の季節には近畿などの低山歩き、谷歩きが多かった。これは全日本を通じての状態で、春や冬の中部山岳へ本式に行くのは一部の熟練家のみで、今のように登山の駆けだしの出来ることではなかった。それはまた交通機関、道路、登山路、小屋、通信機械、装備などの一切において、今日よりはるかに条件が悪かったためでもあり、高山というものに対する畏怖崇敬の心が強かったせいでもある。ついでながら日本の山にアルプスなどという名をつけるのを私は昔から好まず、曾てそのことを朝日放送の初期に「朝の随想」というのでもいったし、二三のものにも書いた。三千メートル内外の山の並ぶ、相当に規模の大きい日本の山岳地帯をこんな名で呼ぶのは、大阪を東洋のマンチェスター（この頃はいわないが）、別府を日本のベニスなどというのと一般で、手前どもの山は欧洲アルプスの模造品でございますと卑下するようなものだから。イギリスのウェストンが始めて日本アルプスの称を用いたのは、欧洲アルプスを知る外国人のこと故これはうなずける。しかし、その後六十年間日本人が何の反省もなくウェストンの後塵を拝しているのは、欧米崇拝、あちらさん的思考への盲従の一つのあらわれともいえるからである。（ウェストンより少し前にやはりこの称を用いたイギリスだかの地理学者があったとも聞いているが、どちらにしても、外国人なら話は別である。）

旅行部がはっきりと山岳部に名称をも改めたのを戦前の第三期としようが、それは昭和十三年春のことであったのが、手もとにある当時の山岳部「部報」第一号（十四年二月発行）でわかる。それ故、昭和十六年三月卒の梶山良里君の時代にはとくにそうなっていたし、この人や、十七年九月卒（戦争のための繰りあげ卒業）の和登良行君などは、この時代の功労者である。和登君は今も山やスキーを楽しんでいるし、何年か前に山岳部へテントを寄附したいといわれて取りついだが、時の部員諸君は一向反応を示さず、そのままになった。右の両君を特に山岳部の人として記憶しているのは、二人とも私がいた仏語部の学生であったからだが、また当時この語部の学生が山岳部に多かったのは事実である。この時代にはある程度岩登りも行われ、部員は六甲あたりへ平素の練習に行ったし、中部山岳でも旅行部時代のように山小屋へ泊るばかりでなく、今日のようにキャンプを張ったこともしばしばとなった。しかしこの山岳部隆昌のきざしも、戦争の激

化、さらにその情況の悪化に伴って、大きな実を結ばずに終ったのである。

戦中戦後の足掛け七年の不在の後、私が昭和二十五年に母校へまた呼びもどされた時には、山岳部はなくなって、戦前の功労者白井教授は九大の久留米分校へ去っておられた。それからの相当長い期間は、有志が同好会的に運営していたようであるが、山へ行く人は決して少かったわけではない。その頃では、桑山誠君（外語から戦争中に校名の変った外事専門学校の二十五年三月卒、外大の二十八年三月出、イスパニア語科）が記憶に残る。同君がリーダーとして高瀬川遡行、槍、穂高行をした折、私も個人として参加したからなおさらである。

山岳部として再建復活してからのことは、若い先輩諸君をして語らせよう。同じ学校の中にいても、私も折に触れて聞くだけであったし、その時代の先輩たちには、現在の部員でも名を聞いたり、親しかったりする人もあろうから。

現在の山岳部と私との関係は、昭和三十九年五月、当時フランス語科三年になったばかりの村上泉君が、部の後立山縦走の途中で、不帰険において墜落し、救けあげられたが死亡した時に始まる。当時山岳部には教官が誰もはいっておらず、村上君が私の科の学生であったために、彼の葬儀への参列と、救助に力を貸した地元の人々への挨拶とのために、学校から出張を命ぜられて信州へ行き、そこで部の先輩や現役部員の諸君を知った。その縁で頼まれて、その後山岳部長を引きうけたのである。

この時のリーダーであった坂東寛彦君（中国語科）は、そのずっと後に卒業を前にして、郷里で不慮の事故で急死した。村上君の遭難を記念し、登山者に役立つようにとその地点に道標を建立することとなり、それを期に村上母堂東栂枝さんや伯父英夫氏などが部員とともに八方尾根から唐松小屋を経て縦走路へ行った時、私も同伴して、坂東君の行きとどいた引卒ぶりに接した。後日、厳父九平氏から山岳部へ寄附の申し出があり、故人を偲びまた部活動の基金として、難有く頂戴して、私の名で銀行に預け、学生課に通帳は保管してもらっていたが、今回丸山部長にこれも肩代りしていただいた。九平氏のその後の通信では、生前死後の因縁に結ばれて、坂東村上両君の母堂の交遊も始まった由であった。また、村上君が信州塩尻の出であるところから、その後も部員の山行のたびに同家を訪うことがよくあったと聞くし、私も一度松本での庭球部の合宿練習（当時庭球部長をもしていたので）の帰りに、村上君の霊前に詣で、母堂と伯父さんとの歓待に与ったことがある。

わが部でも外国遠征の話が出たことがある。後にモスクワへ赴任した先輩田村俊介君（ロシア語科）がコーカサスの山行を計画し、前記の坂東君や阪本公博君（モンゴル語科）とともに私宅へ相談に見えた。ソ連側との文書往復には丸山現部長も力を貸され、先輩現役の混成でという案であったが、向うからの入山許可が得られずに挫折した。

何も外国へ行くだけが能ではない。また、東京外大が数年前に蒙彊の地域へ出かけたからとて、それを張りあう必要もない。しかし、外国語や外国文化に一番縁の深いわれわれの学校が、登山とからませて何処かの国や土地の調査や研究をするのは、極めて意義の深い事であるし、外大出身者や学生でなければやれない面も多い。個人で他の団体に属して外国の山へ行った人はあるよ

うであるが、部として私の在任中にそれを実現し得なかったのは恨事である。しかし、今後も部の実力が整って、そういう事が計画実行せられるまでになって欲しい。何も、組織も大きく歴史も古く、八方に縁故があってやりやすい綜合大学の山岳部などの、大がかりな仕事を真似ずともよい。また、ヒマラヤやアルプスの一流の高山峻嶺ばかりを目指す必要もない。現地の言葉も風習も知らず、ガムシャラに出かけて、行った先から排斥せられたり非難せられたりする登山団体も少くない折柄、貧しい学校の小さな山岳部でも、自らの個性と特長とを生かした、つつましくて実質的なやり方の、ないことはないと考える。それも、部の充実と先輩現役の団結とが十分にあっての後のことではあるが。

私個人としては、つぎにヨーロッパへ国際学会などで出かけた折には、前にほんの片鱗だけ触れ得たに過ぎぬアルプスかピレネーの山々にもう少し親しみを持ってみたい。また、この五月から私が職を奉じている地沖縄には、高さにおいて論ずるに足る山はないけれども（その最高峯で一昨年登った八重山のオモト岳はわずかに五百三十メートル、尤も海抜ゼロメートルから始まる小さい島の山だけにこの一倍半以上のねうちはたしかにあるが）、西表島などのような、または沖縄本島の北部のような、まだあまり知られない、ワンダーフォーゲル的に見ておもしろい土地はある。また、むしろ鹿児島に近い屋久島の宮ノ浦岳連山中国、九州の最高峯なども、こちらからの方が関西からより行きやすい。さらに、此処から一番近い外国である台湾（中華民国）の四千メートルに近い玉山（新高山）その他の連嶺も、昨年阿里山の頂上その他から眺めて、一層遊意を掻きたてられた。しかしこれは夢の山登りに終るかも知れない。

この原稿は、数年前に「部報」に出すからと乞われて、編集者に渡したものである。その「部報」は遂に出なかった。今回再び同じような話になったので、時の推移と私の身辺事情の変化などのために、旧稿を全面的に改め、これに書き足した。

昭和四十七年六月　於　那覇

（大阪外大名誉教授、琉球大学教授）

山岳部再建の経緯

高橋　洵

私にとって学生時代の想い出は楽しかった事や、悲しかった事苦しかった事全てが山行につながっている。中学生の時に山に入ってより高校、大学と変わる事なく山岳部に属して山に親しんだ私にとってはその青春は山に明け山に暮れたといっても過言でない。私はこの一本槍な青春を誇りに思いこそすれ少しも後悔などしていない。私を山に向かわせた先輩その他周囲の人々及び環境に非常な感謝の念を持っている。

私が山の町大町市の高校より一年浪人の上外大に入学したのは昭和三十一年で当時の教養課程は高槻市にある旧兵舎を利用した校舎で行われていた。山岳部再建の日は覚えていないが、そのいきさつはほぼ次のようである。

入学后二三ケ月して私の属するドイツ語の一年先輩である村上氏（現姓十川氏）より話があって“当時のドイツ語講師木村先生が私に関する内申書か何かから私が大町南高校で山岳部リーダーに任ぜられておった事を知り、これを村上氏に告げ、外大でも山岳活動を始めたらどうかと薦めた”という。村上氏が何故に山をやろうとする動機をもっていたか記憶していないが、山には殆んど素人のようであったのに対し、木村先生は若い時からのベテランで今でも鹿島部落の加納さん宅の例の記帳にそのお名前が見える筈である。扨てその時村上氏の紹介してくれた同好者はインド語かインドネシア語の西川氏と中国語の加藤氏で共に二回生であった。この時かこのあとしばらくしてインド語一回生の西前氏が加わるのであるが、当時の私は浪人による一年間のブランクと入学初年度の周囲に対する不慣れから山岳部（又は山岳同好会）の設立というこの話にはそれ程乗気ではなかった。又一方にこれ等素人の諸氏と山行を共にできるものかという思い上りないしは気負いのあった事も確かである。この年の夏は高校の後輩二〜三名と鹿島から針ノ木に縦走し、久し振りに山の空気を満喫したが、それと同時にやはり俺には山が一番だという強い情熱をかきたてられた。そしてこの止むに止まれぬ気持と前記四氏の変わらぬ熱意にひきずられてこの年の暮に山岳部設立の話がまとまった。こうして何回かの打合せを経て最初の部員募集ポスターが掲示板に張り出されたのは昭和三十二年四月の上八本校舎での入学式の時であった。即ちこの年から高槻校舎が廃止されて上八に統合されたのである。但し記憶があいまいで申し訳ないが高槻校舎時代にも募集ポスターを張ったような気もするが、いずれにしろ上八本校舎に統合された時点でのメンバーは合せて五名である事に変わりはなかった。さて入学式のポスターには「山岳同好会」、「女子の入会歓迎」とか「未経験者歓迎」と入れてあった筈である。つまり私としては入会する人もきっと素人であろうからグレードの低い気軽な山行をなるべく大勢の人々と楽しめばよいとの考えであった。事実相当数の入会者は全て未経験者と言える人々であった。「山岳同好会」としたのもこの面の配慮からで、山岳部イコールきついシゴキという印象を与えない為であった。こういった私の考え方は会の運営方針、即ち登山対象とか登山方法にも徹底させそれはそれなりに成功し、山岳会（のちになって山岳部と名称変更した）の存続発展をみたのであると自負しているが、翌年の秋頃からこの私の方針では部の運営に自信が持てなくなるという困難な事態が生ずる事となった。即ち一部の上達した部員の満足を得るにはこの方針を変えざるを得ず、一方私自身としてもより困難ないわばより程度の高い山行を望む気持が強くなって少数派につくか、他の大多数の登山愛好者につくかという二者択一を求められる事態に遭遇する訳であるが、この経緯については部の発展にとって大切な事件であったので別の機会にお知らせしようと思う。

扨て募集により男ばかり二十名近くが集まり正式に山岳同好会がスタートした。何しろこれ等の人々は山に入った事もないのであるから、ある教室に皆を集め、まず装備の説明から始めて最

低必要品を準備させた訳であるが、キスリングザックの寸法から指定しなければならぬのであるから、どんな気持から応募された人達かわわかろうというものである。会の最初の行事は五月に行った御在所嶽であるがこの時は私を含め殆んどが不参加で、村上氏、西前氏等の四〜五名であった。従って二回目の行事に当る昭和三十二年七月の南アルプス駒ヶ岳より北岳縦走が正式の頭初行事とも言える訳で、参加者は十五〜六名と多数にのぼった。即ち三回生六名、二回生二名と一回生七〜八名である。人々の格好は夫々思い思いでザックを背負ったぶざまな姿をみてこれからの十二日間の縦走に大いに不安を覚えたものである。この時の写真を観て戴ければ現在に続くその后の部活動の記録とは判然一別できるものであって、駒ヶ岳での全員集合の写真は土建屋さんの集まりと言ってよい。何事であれその初期の幼稚さ、困難さ等今になって分るオカシサを示すものとして非常に懐しい記録である。縦走の初めの三日間は慣れないその背負荷の重量からダウンする者続出で行程の遅れと荷物の配分に気をつかったが、仙丈岳へのあたりから調子がつき写真を見ても山になじんでいる様子がよく出ている。縦走も終りに近づいた北岳で雨が降り出し殆んどの人がバテ出した。この為比較的元気な者を先行させバテた四〜五人を縦走路直下の山陰に集めて飯盒の残飯にミソと生の玉葱をのせて出した。降りしきる雨の中で土気色の顔をして食べる彼等を元気づけたのは忘れられない光景である。夏山が終って三名ほど抜けたが一人を除きむしろ本来のラクビー部に戻っていったと解した方が正しい。秋には唐松から鹿島槍への縦走に奥田、坂田、大藤（ラグビー部員で翌春退部する）並びに私の四名が参加した。二日続きの雨のあと雪と強風の中他の登山者の止めるのもきかずに唐松小屋を出発した。五龍にかかる頃より晴れ上り新雪を踏みしめて頂上に立った。この山行によって奥田、坂田の両氏は自信がついたようで特に奥田氏はこののちの山行に強力な戦力となるまでに成長した。冬休みは私の故郷のスキー場でスキーを楽しんだ。参加者は八〜九名であり満足に滑べれる人は居なかったが、私としては春休みの針ノ木登山の為にスキーを覚えて貰いたかったからである。この三月の針ノ木には正月のスキー参加者の全員（だったと思う）を含めて十数名が参加した。激しい降雪の中を篭川沿いに大沢小屋に向かったが、スキーと背負荷の重量並びに風雪に負けて皆元気を失い初日にしてダウン大沢小屋にも着けなかった。為に途中の営林小屋に入り翌日は荷物だけを運び三日目にして大沢小屋に入る有様であった。この山行で忘れ得ない出来事に二件ある。ひとつは雪渓上でのスキー訓練中に田村氏がデブリ上の吹き溜りに頭から突込み姿が見えずに二本のスキーだけが空中でもがいていた様であり、もうひとつは頂上直下まで皆をリードしたところで横列に手をつなぎ快晴の頂上に一気に登った。そこで休んでいる時にウィスキーをやりすぎて皆ふらつきながら少し降りてから酔った勢いで急斜面を尻にヤッケを敷いて一気に滑り降りた事である。新雪の急斜面を多勢が並んでグリセードならぬシリセードをやり雪崩にも逢わずに雪渓までたどりつけた事は全く神の加護というほかなく、あとになって私は冷汗を拭うと共に深く神に感謝した事を覚えている。ところでこの山行は皆初めての雪山である。ピッケルの使い方、アイゼン、ワカン、グリセード等全てが初めての経験であったが幸い頂上に立つ事ができた事もあって(初心者にとっては感激するものだ)この山行を契機に部の体質は一変した。即ち夏の南ア、冬の針ノ木を経て部の

基礎は固まったと言ってよく、新部員の中からも田村、奥田、坂田といった戦力が育ち、又皆が常に登山知識の吸収に努力したので山岳同好会設立一年にして外に向っても何とか格好のとれる状態になった。彼等は山行の経験こそ僅かだが日頃の真剣な努力によって登山知識に於ては私を追い越さんばかりで、以后私の負担は大きく軽減された。翌年、村上、加藤、西川の三氏は四回生になって部の活動に参加する機会は稀になったが、西前氏、田村氏、奥田氏、坂田氏等が協力して部を前進させた。昭和三十三年四月には更に新入部員の加入があって山岳部の世帯も大きくなると共に部活動も一段と活発になるのであるが、これについては別の機会に書く事として、茲では誕生からよちよち歩きできる事になったところまでをお伝えしたところで筆を折りたい。いずれにしても私として非常に幸運であった事は山岳部設立時に前記村上氏等三氏が私をひっぱってくれた事と常に向上欲に燃えた西前、田村、奥田、坂田氏等が一致協力して部の基礎固めと発展に尽してくれた事で、これがあったればこそ外大山岳部が今に続いて活躍している事を思うとこれら各氏に対して改めて感謝の意を表するものである。

〔D—35年卒〕

戦前の外語山岳部のこと

白井　正

大正十四年から昭和二十一年三月までの二十一年間教師であった大阪外語について語るべきことは余りに多いが、私にとって特に忘れ難いことは戦時中の外語のことであり、また部長として部員と山で苦楽をともにした山岳部のことである。書きたいことは尽きないが、残念なことには手元には全く資料がない。二十年三月十三日の大阪大空襲で外語校舎の焼失と時を同じくして私の住宅も丸焼けとなり、山行の記録や写真類を失ってしまい、また年月がたつに従い記憶もうすらいでしまったことも多い。

山行をともにした部員で戦線に赴いたまま、再び相会うことのできなかった人が多く、その中には外地に出かける前に愛用のピッケルをかたみのつもりか家まで持参してくれた者もあり、山の仲間のだれかれの顔や山でのしぐさだけは今でもクッキリと目にうかんで来る。亡き山の仲間たちを偲びながら、戦前の山岳部のことを記すことにしよう。

山岳部の前身は旅行部であった。私がその部長をひき受けたのは、たしか昭和七年であった。ウソかマコトか知らないが、それまでの旅行部について校友会のお金で温泉宿でノンビリ遊んで

いるとの風評もあったので、私が旅行部長となってからは部の行事として月に二回位の近郊へのハイキングや古寺巡りをすることにした。しかしこのようなことでは物足りず本格的な登山にとり組むべきだという気持が部員の間に強くなり、昭和八年度から山岳部に切りかえ、日常の行事として部員とを主にした六甲山、惣河谷などの岩場でロック・クライミングの練習をやり、部員以外を交えて近郊のハイキングも従来通り行なうことにしたが、山岳部第一回の夏山は北アルプスの常念岳——大天井——喜作新道——東鎌尾根——槍のコースを選んだが、部員にアルプスの経験者はなく、近頃とちがって案内書も少く、結局信州大町の対山館（早大出身の故百瀬慎太郎氏の経営する山行の根城であった旅館、現在廃業）に連絡してガイドを世話してもらい、また冠松次郎氏の著書などを参考にして四泊五日の山行を無事終ることができた。その後夏山では湯股水股——槍——穂高、後立山、針の木——五色原——立山——劔、鳥帽子、笠岳などを踏破したし、涸沢でキャンプを張ったり、部員有志による秋の上高地——槍の往復、伯耆大山でのスキー訓練も行なった。北アルプスの主要コースをすませて、これから南アルプスをと考えるようになった頃は戦局が深刻化し断念せざるを得なかった。ただ外国移入のスポーツが資材不足も手伝って禁止、制限されたのとちがい山岳部の活動は練成登山という軍事色の名の下に昭和十八年までは夏山も行くことができた。

夏山でガイドに頼ることも四回目からは止め、山小屋も素泊りで自炊形式をとることにした。また夏山の前には参加予定者の耐久訓練として宝塚を土曜の午后六時に出発、六甲を横断、神戸の裏山ひよとり越えに翌日午后二時頃到着するということも毎年行なった。この徹夜山行は都会育ちの新入部員がいきなりアルプスに行けば夜の山の静寂に参ってしまい、石油ランプのうす暗い光におびえてトイレにも行けない者もある仕末なので、精神訓練の意味も兼ねていた。戦線から無事帰ったＯＢが、この徹夜行軍とアルプス登山で心身を鍛えたおかげで外地での行軍にも耐えることができたと述懐した者も少くない。このようなに歴代の山岳部員の山の道場であった六甲も近頃は関発も進んでいると聞く。そのような六甲には二度と行くこともないであろう。

附記、記録がないので文中の年月も不確実であり、記憶ちがいもあることを諒承されたい。

白井先生は戦前、戦中と大阪外大（当時は大阪外国語学校）で法律学を教えられ、同時に旅行部、山岳部の部長をされた。現職は西南学院大教授。九州に帰られてからも、四回程、中部山岳へ出掛けられ、又、九州本土では最高峰の九住山へは、夏冬を問わず登られ、今夏までに六十数回の多きに上っている。尚、現在、福岡県勤労者山岳会の会長をされている。

——編集部——

わが旅行部時代

平井　典嗣

私達が香川武一氏（Ｒ－１１）や真野太一郎氏（Ｆ－１１）などの先輩達から旅行部を引き継

いだ時分には、旅行部なんて一体何をしてんだ、金を使っては物見遊山か……というような大方の批判とも叱咤ともいえる声が生徒の中にあった。旅行部（註１）という名称から来るイメージに禍されていたのかもしれないが、とにかく私達はこの汚名返上を行動であらわすことにした。一人でも多くの人に参加してもらえるようにと殆んど毎月のように手近かの山々への登山計画を発表、実施して部活動を続けたことを想い出す。

圧巻は何といっても昭和１０年夏のアルプス登山であったと思う。休暇になるのを待ちかねたように、二班の登山隊がアルプスをめざした。一班は上高地からいわゆるアルプス銀座コースを、又第二班は白馬岳から黒部を経て宇奈月へ出るコースを辿ったのである。私は第二班に属していたが、山頂から拝した御来迎は、３０年以上たった今でも瞼の奥に焼き付けられているが、私達は白馬尻の小屋に一泊し、二日がかりで白馬小屋に入ったので、誘導を依頼した強力からまるで女の山登りだとひやかされた。それにもかかわらず、私は背中のリュックの重さに耐えかねて、強力に助けてもらったことを憶えている。ともあれ、このアルプス登山は大成功であって、参加者にも大いに喜んでもらえたと思っている。余談ではあるが、その頃学校の修身の時間に、金本正二先生から、近頃の若者は山を征服したとよくいうが、これをなんと心得るかと突然の質問を受け、ドギマギした記憶もある。事実、私達も高低の差こそあれ、山頂には度々立ったが、征服したと考えたことは一度もなかった。自らの体力をもとに一歩一歩と踏みしめて登頂した時、只その雄大な景観に接し、気分爽快、忘我の境にひたり、巧まざる自然の偉大さを感じるだけであった。

今一つの大きな行事は、同じ年の第１４回目の記念祭であった（註２）。旅行部の内外に対するＰ．Ｒ．をかねて世界観光ポスター展覧会を開催した。先輩や知人を頼って、新聞社、国際観光局、領事館などから、ポスターや写真などを借用したのだが、部員の各位は上田章君（Ｄ—14)を始めとして方々駆けずり廻った甲斐あって、実に多数の展示品が集まったのである。当日は、合同教室二室を借り受けて展示したのだが、設備が悪く、又余り欲張りすぎたので、十分は効果はあがらなかったようだ。只、今は亡き久保襄君（Ｆ－１２）がものにした、黒幕の上にアルプスの概念図を書き、穂高、槍などの山々の写真をそれぞれの場所にあてはめた展示は、今も忘れることができない。

又、余談とはなるが、部活動の源泉である校友会予算の分取り合戦では、旅行部の立場は極めて弱く、乏しい資金で参加者に対する援助は何一つできなかった。私自身、夏のアルプス登山のために、年末年始に天王寺郵便局へバイトに行った程である。更に驚いたというか嬉しかったというか、某日、私には直接縁もゆかりもない本多平八郎先生（英語）が小宮町のおでん屋の二階へバイトをした者を集め、一杯御馳走してくださったことも印象に残っている。

こうして在学中、どうにかこうにか旅行部に対する大方の認識を改めてもらうことができ、又行事への参加者も段々と増加してきていたことなどを考え直してみると、やはり私は何かにつけ恵まれていたのではないかとさえ思われる。風聞するところによれば、この時代が旅行部の全盛期ではなかったかという話もあり、私は今更のようにああよかったと嬉しい気持ちになっている。

その当時、想い出の多い先生方や学友の人達を紹介し、感謝の意をこめて往時を偲ぶよすがとする。何分３０年以上もたった今では、私の記憶もさだかならず、思い違いや感違いがあるかも知れない。あいつもとうとう耄碌したかと御一笑の程を。

部長の白井正先生（法律）：その頃生徒課長をしておられたので、校内Ｐ.Ｒ．文書の面では誠に好都合であった。昨年卒業後初めてお目にかかる機会を得、懐しい想い出話にふけった。

畠中敏郎先生（フランス語）：本当によく参加していただいた。恐らく参加率では先生の右に出る者はいなかったのではないか。得意の謡曲を口吟される時は最も御気嫌な時であったのだろう。

他に故吉野美弥雄（中国語）、小西茂（経済、植民政策）、森沢三郎（英語、歴史）、林和夫（フランス語）の先生などの参加も往々あったことを想い出す。

先輩の真野さんとは今でも時折り会う機会があったが、松井秀一君（Ｅ－１２）、森孝雄君（Ｅ－１２）、本一夫君（Ｓ－１２）とは白馬岳登山の帰途宇奈月温泉の宿で共にビールのグラスをあげ、山を語ったことを憶えている。

私達の期間を通じ、又卒業後も旅行部と共に歩んできた人に丸山忠雄君（Ｒ－１３、現教授）がある。現に不自由なからだをものともせず山歩きを続けているとは、全く雀百までというに等しく驚嘆の外はない。

その他参加回数の多かった人に、中島正之君（Ｈ－１２）、湯川正典君（Ｅ－１２）、中谷宏君（Ｆ－１２）、故馬場研君（Ｆ－１２）、徳尾健彦君（Ｆ－１４）などを想い出すが、後輩の人達の名は殆んど失念してしまって申しわけない限りである。

〔註１〕　昭和１０年春の外語旅行部という記念写真で小生の外語１年生時代が終っている。故吉野（中国語）白井、森沢、畠中の諸教授、香川武、真野、島田、平井、久保、黒田、入交の諸君が写っているが、ここにいない人を加えても学生は１５名以下だったと思う。

〔註２〕　小生の２年生の時の旅行部の記念写真では白井、畠中両先生をかこんで、平井、馬場（Ｆ）、中島（Ｈ）、山本（Ｒ）、上田（Ｄ）といった顔ぶれで、やはり部員は１５名程度、文字通り旅行部ということで、今日の山岳部やワンゲル部のような訓練精神の行き届いたものではなく、行動も夏山や京阪神の山へのハイキングやキャンピングに止まっていたのだから、山岳部の萠芽はむしろ旅行部の外にあったのではなかろうか。それでも平井キャップの指揮下に現在のＡ１－３の棟で外語記念祭のときに催した「世界観光展」の準備作業などは、成果の何如はとにかくとして、当時の非常時局への傾斜にスピードの加わっていく中で、わずかでも自己陶酔的な行事であったといえる。

〔Ｆ－１１年卒〕

訃　　報

平井さんは昨年６月１４日、インドのニューデリー郊外における日航墜落事故により急逝されました。ここに深く哀悼の意を表します。

くり返し読んでほしいこと

情熱の個人差というものが現に存在している以上、山岳部はこの雑多な人間達をすべて包含する宏やかなものでなければならない。

ここまでは自明のことであるが、実際の活動に於ては各人の個性は殆んど抹殺される状態が続いて来た。（創設以来、僕はこの点に不満を持ち続けてきた。）

その責の大半は部員各自に確とした主体性が欠けているためである。

十日を越える苦しい夏山の縦走に、一体どんな根拠をもって君は参加したいと言ったのか。唯、無知だったから、と言って済ませるものなのか。君には君の山がある。

無理をして高価な道具を揃えていく程の情熱もなく、十数貫の荷を担ぐ程の体力もなく、それを造ろうと努力する程の熱意すらない君が、雪渓練習にenergyを消耗したり、積雪期の山へくっついていったりするのは、一体どんな了見なのだろう。いや、少し言いすぎたようだ。「君には君にふさわしい雪山が他にあるはずだったのに」と言い直そう。

人々が夢想だにしなかった様な烈しい、困難な登攀をしたいというのか？それならそれにふさわしい準備をしなきゃなるまい。お金も要る。情熱と同じ位それも要るのだ。

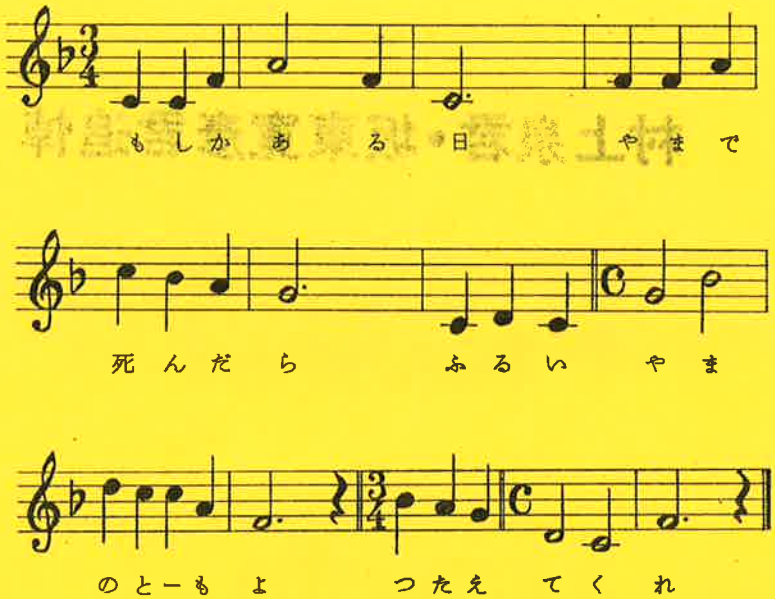
—— ノート「光みなぎる所」より ——

村上泉君・坂東寛彦君追悼

もしかある日

―― ロジェ・デュプラの詩より ――

島　次郎　編詩・作曲



もしかある日

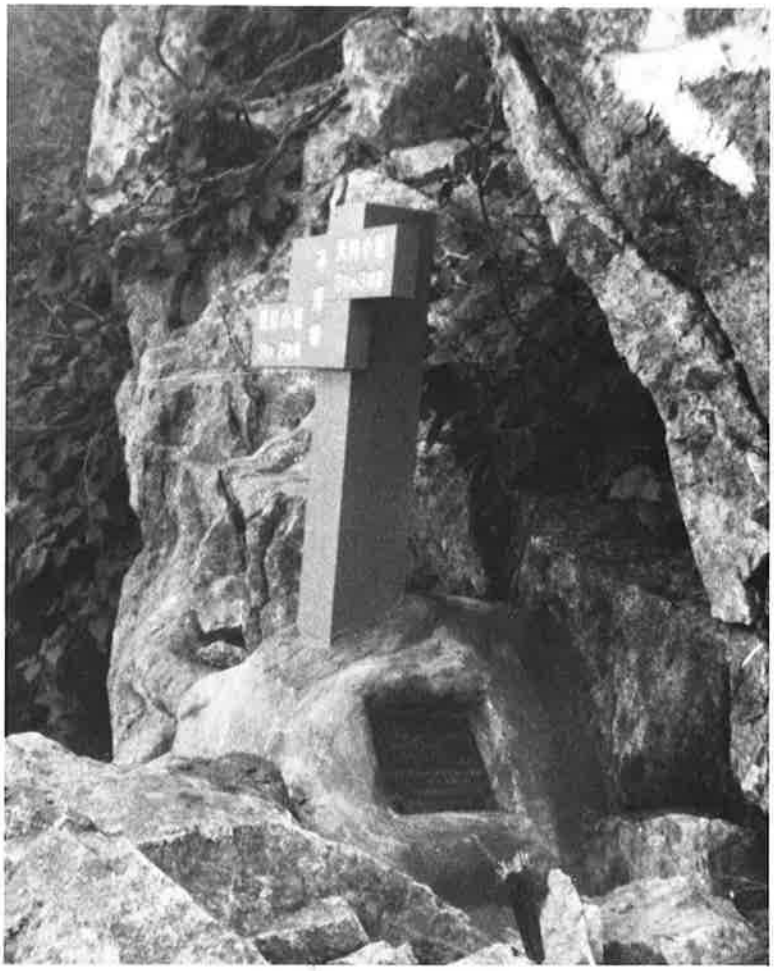
もしかある日
やまで死んだら
古い山の友よ
伝えてくれ

ははおやには
安らかだったと
男らしく死んだと
父親には

友よ山に
小さなケルンを
積んで墓にしてくれ
ピッケルたてて

俺のケルン
美しいフェイスに
朝の日が輝く
広いテラス

村上泉君　　坂東寛彦君

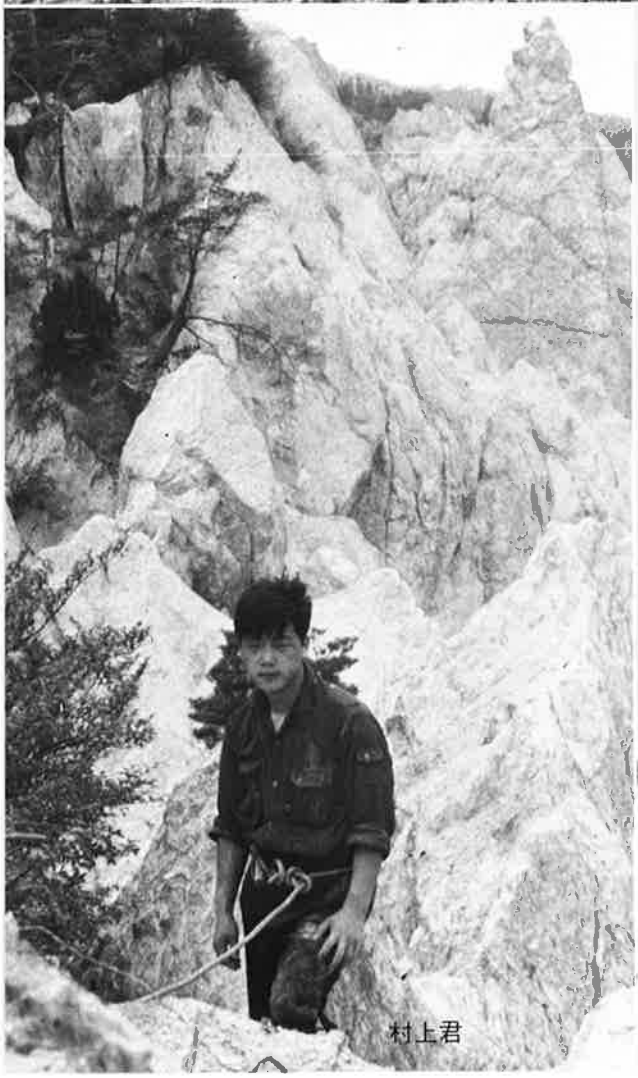


「泉のケルン」　不帰峯

さみしくも
岩場のかげに若桜
散りて身にしむ
友のなさけに

ともえ

坂東君



村上君

坂東君

村上泉君山行略歴

１９６３年	７月	夏山合宿　剣岳二股定着
	８月	夏山合宿　剣岳－薬師岳－西穂縦走
	１１月	秋山合宿　笠ヶ岳
	１２月	冬山合宿　焼山
１９６４年	５月	５月合宿　後立山縦走中、不帰二峰にて遭難死

坂東寛彦君山行略歴

１９６２年	７月	夏山合宿　剣岳二股定着
	８月	夏山合宿　剣岳－槍ヶ岳縦走
	１２月	冬山合宿　五竜岳
１９６３年	７月	夏山合宿　剣岳二股定着
	１１月	秋山合宿　笠ヶ岳
	１２月	冬山合宿　焼山
１９６４年	５月	５月合宿　後立山縦走
	６月	故村上泉君追悼山行　不帰岳
	７月	後立山縦走
	８月	有峰－三俣蓮華岳－双六岳縦走
	１２月	冬山合宿　杓子岳
１９６５年	５月	５月合宿　後立山縦走
	７月	夏山合宿　剣岳二股定着
	１２月	冬山合宿　中央アルプス西駒ヶ岳
１９６６年	８月	故村上泉君遭難碑建立山行　不帰岳
１９６７年	１月	徳島県小松島にて事故死

うんちゃんへ

村上とも江

「泉」

「母ちゃん何？」

と今にも返事をするような気がします。あゝ何としたことでしょう。一瞬の間の出来事にどうしても死んだとは思われません。大阪で元気よく生活していて、もう便りでも来そうだ、そんな風に思えてなりません。何気なく仏壇の写真を見た時、ハッとします。お前はもう死んでしまった、本当なの？どうしても信じられない。胸は痛み、おそい来る悲しさに、私も一緒にお父さんやお前のそばへ行きたいくらいです。折角兄ちゃんやお前の立派に一人前になった姿を楽しみに、今日までつらい苦しみにも耐えて働いて来たのに……。一番知っていてくれるお前ではないの……。卒業式には親子三人で参列して、ありったけのお祝いして、後は京都、奈良見物をしようと何事も話し合い、こんな幸福な事って他にあるかしら最高に母さんは幸せ者と信じていたのに……。もう愚痴はよしましょう。

お前は山が好きだったね。二年頃から急に山の虫に取付かれたようになって了って。去年七月、はじめてアルプス縦走して家へ帰った時の、あのものすごい食欲。いくら食べても食べても満足感を感じないといって私をあきれさせたり、兄ちゃんは、「母ちゃん、食い倒されるから、覚悟しなさい。」などと言って笑ったっけね。

胸をたたいて、どうだいこの胸、山登りできたえたからこんなに丈夫で、食欲も出たのだよと威張っていたね。山登りに反対すれば、「母ちゃんは僕の中学の頃、松本駅で山男達を見て、あの丈夫そうな体と、とても感心して羨ましそうに僕達と話をしたじゃないか。」と如何にもお前が山登り姿と分厚い体をしたのを喜こぶかというふうに私に少し反発したことがありました。一度だけでした。後は母ちゃんが心配すると思ったのかなるたけ山登りの話や計画なぞ話しませんでしたね。七月の山なら一度だけ、とお願いしておいたのに、今度は連休に山へ行ってくるけれど後で便りするとあったけれど、あちらの低い山でキャンプ程度と簡単に考えていたのに。日記には、塩尻駅へ停車した時、我が故郷を懐かしく、感無量の面持でながめたと書いてあったね。私もまさか塩尻を通過して白馬へ行ったなど露知らず、こんな事なら心配させてもよいからかえって知らせて頂いて駅まででも行ったら最後のお別れもできたのにと残念でなりません。

あの時は無性に会いたかっただろうね。後髪ひかれる思いがしなかったかい？

新聞社の電話で遭難を知り、動顛して了い、金づちで頭をガーンとなぐられたような思いでした。腰を打っているが外傷はなく、話もするから一命は取止めたとの報せで、足のしびれるのがちよっと気になるけれどまあ良かったと安心し、大町署でも明朝来ればよい翌日山から下ろすとの事でしたので、塩尻病院へ連れてくれば看病しながら働く事ができるから、早く早く山から下りて来てくれることを念じていたのに……。

「ウンちゃん」（お前の仇名はウンちゃんだったね。）何時頃からだったかしら？口の廻らない小さい時分三、四才だったかも知れませんね。ウンちゃんのウンちゃんのと物をねだった事か

らとうとうウンちゃんになってしまったのかもわかりません。とにかくウンちゃんになって了いました。友達や従兄弟や伯母さんまでウンちゃんにして、大人になった今でもお前は嫌がりもしないで、家へ帰ればウンちゃんになりすましていましたね。恥ずかしがりやで話術は下手でしたが人には好かれ、先生にも可愛いがられ、中村先生のお宅へ兄ちゃんとお正月泊り掛けに行ったり、武居先生の結婚式には家の留守番に行って記念にアルバムを頂いたり、何人先生が変わってもウンちゃんで通って来た。この名前ももう呼ばれる事ができなくなりました。

信大へ休学しないで行っていれば山へ行かないでいたかな？私のそばに居れば行かなかったかな？と思ってみるけれど、信州にいたら直更登ったかも知れませんね。

高校当時受験勉強で一生懸命だった時、お前の為に話も控え、ラジオも遠慮し、部屋も別々にしてやったら、兄ちゃんが来た時、二人ばかりの家族で別々にいるなんてと怒ったけれど、これも母ちゃんがさびしいのに悪いと思っての子心で嬉しかったけれど、二人共受かるまでのがまんと笑っていたり、夜九時になると「母ちゃん九時九時」と言ってお茶に夜食をねだり、食べながらも黙って勉強しているので、私も折角二十分ばかりの時間話し位したらと思ったけど本人が一生懸命なのに、こちらも遠慮して、横で黙って天井見たり、お前の手元を見たり思わずおかしくなって笑い出したらびっくりして、「何したの？」と聞くので「この様子を漫画に書いたらおもしろいでしようね。」と大笑いしたこともあったね。

「伯母ちゃん達は僕ができると思い、又好きだからやるのだと思っているけれどできないからやるのだ。僕だって遊びたいわ。遊んでいられないからやるのだ。」と日頃言っていたけれど根気がよかったのには感心したよ。

信大へ二ヶ月通った時、来年度の受験と二股かけて通学したけど、無理とわかった時、毎日憂うつな顔して帰り私はすぐこれはいけないと思って、早く休学して受験勉強しなさいと言えば「待って。」というので、「ハッキリしない子だね。母ちゃんでさえ早く休学した方がいいと思っているのに、本人のお前がどうしてぐずぐずしているの？」と怒ったら、パッとめがねはずしてほうりなげ、ワァーと泣いてしまい、「親子二人きりで暮していて同じ考えだと思っていたのに考えが違う。」と言って泣かれた時にはびっくりしました。初めは二、三ヶ月様子をみていけなかったら休学するという約束でしたので、お前はまだ余裕があると思っていたのでしよう。本当は母ちゃんは信大へこのまま行く気になり、僕が浮かぬ顔をするので反対の言葉を口に出したとかん違いしたのですね。悪い事を言ってしまったと後悔し、一夜たって「泉、四月も終りだし、丁度切りもいいから思い切って休学の手続きをしておいでよ。」と言ったら、「母ちゃんに悪いがそうするわ。」と言って、その日手続きをすませたらほっとしたのか、翌日から高校の図書館へ通うのにあの明るい顔、今でも、一生忘れることはできません。夏休みになるとお寺の広間を四、五人で借りたり、草むしりやカネ撞きの奉仕をして喜こばれお茶やおしる粉をごちそうになったり、小さな目をかがやかして話したあの頃、苦しかった浪人生活の筈だが、私から見ればとても楽しそうでした。

今年の春休みには、「駅馬車」と「ベン・ハー」を二人で見に行き、よかったねよかったねと

繰り返し、途中で「母ちゃん負んぶしましょう。」と嫌がる私を無理やり負ぶって、つねおぶったずら？といいながら急に飛び出し、家の側まで来てポンと落とすようにおろして大笑い、今度は二三日経って腹の上に乗れと、突拍子もない事を言い出しお前の人をからかうしつこさに負けて、やっと上手に乗れたと思ったらウーンとうなって上へもち上げられびっくりしたら、「どうだい腹の皮は強いね。」と二人で笑いころげたり、大阪へ帰る前にいい映画を見たり、母ちゃんを負んぶしたり、腹の上にも乗せたりして、つくづくしゃべって帰ったけれど、後になって思えば、せめてもの恩返しに負ぶって返したのだと思います。

お前の事だから救助隊の行くまでの一昼夜、どんなに苦しかったことか。母ちゃんにすまない恩返しもできず何とか生きようとがんばっていたでしょう。山のふもとまで行き乍ら会うこともできずに終ってしまいました。

短い命だったとあきらめるより外ありません。まさかお前も母ちゃんを残して先立つなど夢にも思っていなかったでしょう。

兄ちゃんも後始末を終えて東京へ帰り、ようやく一人ボッチになって、さびしさと悲しさに身の置きどころもありませんが、伯母さんの家へ行って忘れることにしています。

走馬燈のようにそれからそれと在りし日のお前の様々が思い出され、この稿を綴っているうちに、「母ちゃんしっかりしなさいよ。僕が守ってやるよ。」と言っているように聞こえます。

泉ならきっと守ってくれると信じています。母ちゃんもお前や兄ちゃんのためにも明日より心のきりかえをして再出発します。見ていて頂戴よ。　　—追悼文集「山と泉」より—

村上泉君を失って

坂東寛彦

村上君を後立山連峰、不帰二峰で失ない、今迄一緒に山へ行っていた仲間として、これ以上悲しいことはない。更におかあさん、兄さんをはじめ彼を取り巻いていた人達に対し、本当に申し訳ないことをしてしまい、何とお詫びをすればいいのかその言葉を知らない。

この山行は、河北（ロシア語４年）、伊藤（インドネシア語４年）、坂東（中国語３年ＣＬ）、村上（フランス語３年ＳＬ）、阪本（モンゴル語２年）の５人で白馬岳から鹿島槍ヶ岳まで縦走の計画だった。ただし伊藤、阪本は五竜岳から遠見尾根を下山する予定だった。彼と一緒にこの計画を検討していた時、「注意すべきは不帰峰と鹿島八峰のキレットだ」と言っていたのに、その彼が不帰で失敗してしまった。失敗の原因は今もまだ検討中だから、公式には後程別の機会に発表することにして、今は個人的意見として述べます。

彼は初日から一番元気で、仲間を引っ張るようにして白馬大雪渓を登った。２日目天候も回復し、白馬岳頂上で春山のすばらしさを満喫していた。この日も元気で天狗小屋の近くで雪上訓練を意欲的にやった。その時は慎重にトラヴァース・ストップをやっていた。３日目も彼は元気だった。天狗岳登りの途中で彼にトップをかわってもらった。そして、少しルートを違えた。このあたりから彼の精神的負担は想像以上に重かったらしい。彼の性格からして、簡単に割り切れといっても無理な相談だったろう。正しいルートに戻って僕がトップになり、不帰の取り付きのと

ころで昼食し、オーダーを河北、阪本、坂東、村上、伊藤と組み出発した。そして鎖り場を緊張して通過したあと、一息ついて魔の雪面トラヴァースにかかり、そこで彼は不幸にも左足をスリップした。今まで慎重に歩を進めていた彼なのに、魔がさしたというのだろうか。この時に限りピッケルを充分さしてなかった。そして急斜面を滑って行った彼は１５０m下のブッシュでとまった。そこでは意識もはっきりしていたし、外傷もほとんどなかったので、「ああ助かった。救援隊が来るまでがんばれよ！」と思いながら、伊藤君を現場に残し救援隊を求めて唐松小屋へ３人で急いだ。そして２４時間後に救援隊と現場に到着した。その時も元気で彼は「すまない、すまない」と救援隊や僕等に話していた。それなのに、彼は小屋でみんなの願いもむなしく息をひきとった。後でわかったことながら、彼は頸骨を折っていたのだった。直接の原因は彼の不注意だったとはいえ、遠因は沢山あると考え、充分検討しているつもりです。この検討を通じて、二度とこんな取り返しのつかない犠牲者を出さないようにすることが、僕等の任務であり、彼に対する愛情であると考えています。

みんなからこよなく愛され、人間を愛した彼、その彼の残してくれたものを絶対に無駄にしない。村上君、安らかに眠ってくれ！あとのことは僕等にまかせ、静かに僕等をはるかな空から見ていてくれ！

—— 追悼文集「山と泉」より ——

山に寄せて

荒川征也

人を失うと云うことは全く大きな意味をもっている。岳友、村上泉君が不帰岳二峯に逝って以来、早や一ケ月が過ぎ去ってしまった。一人の人間がこの社会から姿を消してしまうことは、別にそうたいしたことではない様にこれまで思っていた。しかし、今は違う。死が非常な神秘性をもってせまって来る様な気がする。人間の死とは、彼が物蔭に一時的に姿をかくすのとは根本的に違うからである。しかし、これまでの私には、すくなくともそう思えた。人間の死が私に占めるであろう比重を余りに軽視していたとも云える。

村上君が帰って来ないのである。不帰岳に逝ってしまったと云うことすら何かまぼろしの様な気さえする。人間の死は神秘的な感じがすると私は書いた。確かに彼は逝ったのかも知れない。しかし、私にはそれすらも、〝かも知れない〟と云わざるを得ない様な、それを認め度くない気持が強く働いている。神秘的と云うゆえんである。

我々山岳部のあのボロのボックスから村上君の姿が消えて久しい。そして永久にこのボックスに彼の姿を発見することは出来ないかも知れない。彼のはつらつとしたあの姿は、私がここで拙劣な筆で汚すまでもなく、多くの諸兄の流麗な筆致にほうふつとしてよみがえることであろう。我々にとって彼は、彼が単に友人であったのみならず、部員の心の中にガッチリと強く組まれたスクラムの内の一人であったと云う点で大きな意味をもっている。我々山岳部自体に対する批判は種々多いかも知れない。しかし、一見バラバラである様に見える我々山岳部は、部員の強い連帯感によって固く結ばれている。そして、まさしく彼もその一人であった。

山仲間を失うと云うことは、一人の人間が死んでしまうと云う単純な意味をもつものではない。

極言すれば、自分の一部分が失われることである。何故なら、我々山仲間は多くの人間の集合体であると同時に、切り離すことなど、とうてい考えられない大きな一個体となってしまっているからである。

一部分を失うと云うこと——村上君が逝ってしまったと云うことは、我々部員一人一人の悲しみであると同時に、部員全体の（山岳部と名づけられた一個体の）深い悲しみでもあるのである。山行は常に素晴らしいものである。たとえ雪が降ろうと、強い風に飛ばされそうになろうと、山に行くことには非常な素晴らしさがある。それらはとうてい筆の先にのせることは出来ない。何故なら、その素晴らしさ、美しさは、いつでも我々の感覚によってとらえられ味わわれているからである。無理にかけば、〝素晴らしい〟と云う単純でたよりない方法にたよるよりしか方法がない。言葉の不便さと不完全さを強く感ずることである。

何の為に山に行くか。私は多くの人達にいつもこう質問される。しかも、そう云う時彼等はいつも、ひどく哀れそうな目つきで私を眺めるのである。そして、きまって私はこう答える。「生きて帰って来るのがうれしいからさ……。」彼等は驚いて口をすぼめて行ってしまう。しかし、実際その通りなのだから彼等が驚き、あきれてしまっても仕方ない。山は複雑だ。四季折々に、又一日の内にでも、一瞬一瞬にその表情をかえて行く。ある時には、ひどくのんびりとしておだやかな表情をする。鳥も鳴いてるし、白い雲も流れるだろう。そんな時、山はおふくろの様だ。

しかし、山は常にそうではない。いくら我々が全力をつくして頑張ってみても、無情に追い返そうとしたりすることもある。あまつさえ、平気で人の命をも奪ってしまう。人を殺してそしらぬ顔をして立っている。そんな時、山は悪魔に急変する。山では、我々は一瞬たりとも自分自身から目を離すことは出来ない。我々が自分を忘れ、注意を怠る時、山の底知れぬ口があけられる。山に行くのは、自分自身と斗いに行くのだと云ったら言い過ぎになるだろうか。

無事に下山した時、私は今度も又、元気に帰れたと思っていつもうれしくなる。山がそこにあるからとか、山を征服するとか云う考えも、一つの考え方として正当性をもつだろう。ただ、私にそういった考え方が出来ないだけの話である。山はあくまで、私にとって、自己の鍛練場である。

山に汗があり、血があり、涙のあるのは、常に我々を盲目的に引きつける要素として力が大きい。ただ、私は、山にそれらがあるから行くのではなくて、我々自身がそれをつくることが出来るから行くのである。我々——と云うよりは人間——に与えられた能力の限介を知ることの出来る喜びは、山にいてこそ知られるものであろう。

山に何を求めるか。これは全く難しい問題と云うべきである。そして、この答えは沢山用意されていることだろう。ただ何も考えずに登るものは、仮りにあったとしてもそう多くはないと思う。山に行くものは彼自身のもつ答を確かめるべく行くのである。たしかに、山には我々にとって、多くの滋味あふれるものがある。しかし、見方によっては、山それ自体には何もないようにも思える。何故なら、山に行くことに、我々が金を出して一つの品物を購う時の様なイメージを抱いたならば、ひどく大きな失望を味わわなければならないに違いないからである。山は動かないのである。我々が求めるものは、我々自身が発見し理解する様に努力してこそ得られる。山は

その間にあって、我々をシッタベンレイするものだと云ったら、山に対する冒瀆になるだろうか。

〝成程、偉大な山稜は時とすると、その犠牲を要求するのも事実であるが、しかし、登山家は自ら宿命的な犠牲者となるべきことを知りつつも、恐らくは山に対するその尊敬を捨て去ることは出来まい。〟　A・F・マンメリー

〔昭和３９年６月執筆。　H－４２年卒〕

村上泉君のこと（最近の手紙より）

伊藤敏雄

村上東栂枝様

拝復　８月２６日付お手紙有り難う御座居ました。可愛いいお孫さんのことで一杯のお手紙、楽しく拝見させて戴きました。明兄さんのところに三番目のお子さんがお出来になるとのこと、おば様も又一段とお忙しくなられることでしょう。でもお手紙にもありました様に、たったひとりの兄弟の泉君を亡くされた明さんが、同じ淋しさをお子さん達には味あわせたくないとのお気持ではないかと思います。お正月は、三人のお孫さんに囲まれて、おばあちゃんも、さぞかし大変なことと思います。

さて、最近、山岳部現役より、そちらへもアンケートが送られた様ですが、おっしゃられる通り、私共ＯＢとはお立場が異る故、ご返答される必要はないと思いますが、現役の部活動のひとつとして、ご参考までに目を通していただければ良いかと思います。又これも一年越しの懸案ではあったのですが、部創立以来の部員名簿作成も現役の努力のかいあって、あと一歩で完成というところです。近々おば様のところへも郵送されると思います。ただ願わくば、おば様が、亡き泉君への悲しみを新たにされなければ良いのですが…。

皆それぞれに仕事を持ち又家庭をもっている故、なかなか思うにまかせませんが、誰もが塩尻へは出向きたく思っています。夏にはブドウをたらふくいただき、又冬にはこたつを囲み、お手製の漬物に舌づつみを打ちたく思います。おば様も、今年はなにかとお忙しかった様ですが、機会を見つけて、大阪まで足をのばしていただきたいものです。

話は変わりますが、泉君のケルンのことですが、小生自身、もう４年も前になりますが、川田君と出かけた時（途中、カメラ屋のおじさんの所へ立ち寄らせていただいた折）以来遠のいており、申し訳けなく思っております。もう、建ててより、可成月日も経ったことですし、来年の夏には、３、４人集まって不帰へ登ってみなくてはと考えています。この件では、斉藤、保野、河北、阪本等と相談しておきます。１０月も中旬、当大阪でも、秋の深まりを日一日と感ずるこのごろですので、信州では、ひと足早く、もうそろそろ冬の気配すらするのではないかと思います。

時節がら、呉々も御自愛くださいませ。

当方、由起子、浩泰ともども元気に過しておりますので、御安心ください。　敬具

昭和４７年１０月１７日

〔ＩＮ－４０年卒〕

村上泉君遭難報告——抜萃——

1964年4月30日

21：35　急行「ちくま」にて大阪発。車中は、全員席を得て4、5時間の睡眠をとる。村上は座席の下にもぐり込み、中でも良く寝る。

出発時の荷物は全員約6、7貫。

5月　1日

8：30　信濃四ツ谷駅着。

9：00　トラックをチャーター、他のパーティ（6名）と同乗して、猿倉へ向け出発。

10：00　最終的にパッキングをやり直し、登山の第一歩を開始。

12：05　白馬尻小屋を少し過ぎたあたりで昼食をとる（—12：40）。

14：20　ネブカ平のとりつき到着。

15：30　お花畑。

16：30　白馬頂上ホテル着。ただちにテント設営、夕食をすませ、21時就寝。但し、坂東は22時の天気図をとり、22：45頃就寝。

（反省）　この日の天候はガス雨で、視界終始10m内外と不良。時々突風あるもつかの間。村上、阪本好調。大雪渓は例年より雪少く、ナダレ、落石の心配なし。

5月　2日

5：30　起床、朝食。風も有り、雨も小降りとはいえ降っているし、昨日の疲れも有るので、無理をせず天候待ちと決定。昨夜の坂東の天気図から判断して、午后は回復すると見込む。本日の予定を変更して、天狗小屋迄とする。

8：30　やや天気回復の兆し有り。村上、伊藤、阪本はテントを出て白馬岳頂上へ向う（9：30帰幕）。その間坂東、河北はテント撤収。天気完全に回復。

10：25　出発。

12：35　小ヤリのコルで昼食。途中、毛勝三山、剣岳、立山の連峰がはっきり見渡せ、空も青く全員すこぶる満悦。

14：30　天狗小屋着、昨日の雨のためぬれた衣類、シュラフ等を乾かす。

14：40—16：30　附近の雪渓で、グリセード・転落停止（Stop）・トラバース等の訓練を明日の不帰岳に備えて行う。

17：00　夕食をすまし、歌等を歌って19時頃就寝。

5月　3日

5：00　起床、直ちに朝食すます。昨夜半に降雪、一面10cm内外の積雪。風も少々あったが、坂東、河北偵察の結果、夏道完全に分り、風も空身で歩いてさして感じない程度なので、出発と決定。

8：30　天狗小屋出発。全員ヤッケを着、阪本、坂東はオーバーズボン着用。道は最初平坦な富山側なので、アイゼンはサイドのタッシュに入れ、着用せずいつでも出せる態勢で出発。

9：30　天狗の頭着。視界不良と昨夜の雪でトレースが消えたためとで、天狗の頭直下の富山側を巻き込む道を間違えて頭からすぐ下る。2、300m下って気付き、坂東、河北、伊藤手分けして探すも、視界不良のため明らかなルート見付らず、地図と磁石で検討し、北西の方向へトラバースと決定。30分程進むも発見し得ず、止むなく坂東、村上もう一度天狗の頭へ引返し、やっと判明。11：20全員天狗の頭に戻る。約2時間のロスをしたため、白岳小屋迄の予定を変更して、唐松岳迄と決定。

12：10　不帰岳コル着。風の当らない信州側に下りて昼食。テルモスの熱い砂糖湯がとてもうまい。皆でファイトを確かめあい、不帰岳越しを前にして細心の注意を与え、トップを河北がとり、阪本、坂東、村上、伊藤の順に決めて出発。アイゼンは、一峰の富山側を行く間は雪もなく、却って危険と見、つけないことにする。

13：00　不帰岳一峰頂上。小休止。

13：50　二峰取付点着。全員疲れた様子もなく、元気に声をかけあって二峰に取付く。鎖、針金を備えつけたルートを全員緊張して登る。「バランスに注意！」の声を聞きながら、無事悪場を過ぎ、信州側へ巻き込む。風のない雪面で小休止。

14：20　河北、阪本、坂東、村上、伊藤の順に出発。足下6、70度の雪面をトラバース（水平に）。各間隔2、3m前後。トラバース開始直後、村上スリップ転落。直ちにザイル、薬品をもって、河北、伊藤、坂東の順に雪渓を下り、150m下に村上が居るのを発見。（現場到着15時）雪はいつもより少く、6月上旬の状態で、村上の止まっている現場に至る迄、二ケ所小クレバスが有った。すぐ村上のぬれた衣服の着換をし、受けた傷を調べる。左上頭部に少し血の滲んだコブ、舌の裂傷、腰の裂傷。落ちた距離が長かったので、全身打撲は予想したが、意識は極めてはっきりしていた。但し、下半身が感覚を失っていたので、自力救出は不可能と判断し、ビヴァークの用意。伊藤を村上の所に残し、16：10河北、坂東、阪本の三名は唐松小屋へ救出援助を求めに出発。

17：50　唐松小屋着。下と連絡つかず、阪本を小屋に残し、八方尾根下山（18：30）。

19：20　黒菱第2休憩所着。下の細野と連絡つく。但し、救出は明日。

19：45　黒菱発。

21：30　細野着。

22：00　救助本部丸山冷佐氏宅着。救助隊、警察に情況報告。

5月　4日

8：30　救助隊8人と河北、坂東、丸山氏宅出発。

12：15　河北、坂東、唐松小屋着。河北は11：20現場を出た伊藤（村上の意識明確故）と出会い、小屋へ二人で引返す。坂東は救助隊に急いでもらうよう迎えに行く。

13：30　救助隊と共に唐松小屋発。

１５：００　落下（スリップ）地点に到着。救助隊と共に伊藤、坂東荷物撤収のため現場に下りる（１５：３０）。

１５：４０　救出開始。現場の村上は意識もはっきりして居り、苦痛もないとの事で、全員これで助かったと思った。

１７：３０　落下地点発。

２１：１４　唐松小屋着。途中、村上はイビキとウメキ声だけに変り、意識はなかったようだ。小屋ではシュラフに寝かし、皆で全身マッサージを行い、ポリエチレンタンクに熱湯を入れ暖めるが、意識回復せず。

２１：４０　脈博弱くなり、呼吸止まる。人工呼吸開始すると同時に、カンフル注射を計４本うち、他方マッサージを続ける。

２２：１０　小便をし、悲観的見方強まる。

５月　５日

０：４０　絶命と断定、人工呼吸止める。

８：５０　唐松小屋出発。

９：５０　全員現場に向って黙禱を捧げ、後、「もしかある日」が自然と口をついて出てきたが、涙に咽んでしまう。全員無言で１０：５０薬大ヒュッテ着。ここで百瀬、広瀬ＯＢと合流。

１１：３０　兎平で遺族と対面、新たに涙を流す。

検死の結果、頸骨々折が死因と判明、全員はじめて知る。

最後の別れを惜しみつつ納棺。遺体はすぐ大町火葬場へ移される。

５月　７日

１３：００　自宅にて葬儀

〔坂東記〕

不帰岳遭難碑建立報告

期　間　１９６６年８月２７日—９月６日

メンバー　村上東栂枝　村上義明　村上英夫　村上忠　高橋洵　田村俊介
宮崎洋　百瀬泰　保野昭　吉永行夫　伊藤敏雄　佐村幸弘　宮本
畠中敏郎（部長）　坂東寛彦（ＣＬ）　阪本公博（ＳＬ）　井村丕　吉村千代
斉藤清雄　荒川征也　高橋俊平

村上さん、畠中部長、わざわざお忙しいところを入山され、ありがとうございました。とくに、お母さんが現場まで行くことができたということは、本当にぼくたちの喜びとするものです。OBの皆さん、参加を心から感謝します。宮崎さんにはたいへんなボッカをやってもらい、本当に助かりました。宮本さん、佐村さん、吉永さん、伊藤さんには、忙しい仕事や学業をさいて参加してもらい、本当にありがとうございました。

〔阪本記〕

8月27日　晴　　黒菱（11：20）—唐松テント場（17：55）

塩尻にて坂東合流。信州は真夏のような暑さ。あえぎあえぎ八方尾根を登る。

8月28日　晴　　BC発（11：35）—不帰二峰遭難現場（13：10）—故村上君の止った所（13：30）—BC着（16：10）　高橋俊、吉村BC入り（16：40）　BC発（19：25）—八方池山荘（20：45）—黒菱リフトの中間（21：45）—BC着（29日、3：50）

作業の下見で現場まで行ってみる。縦走路の傍の岩壁のタナを整理すれば見通しがつく。高橋によるとセメントは国民宿舎に預けてあるとの事で、宮崎OB、坂東、阪本、サブザックを持ちボッカする。帰途、地震あり。阪本のみ感じる。2度ゆれた。

8月29日　晴　　BC発（9：20）—BC着（11：40）　BC発（11：40）—現場（13：17）—BC着、阪本（16：30）　BC発（15：00）—現場（16：00）—BC着、坂東、高橋（俊）、吉村、宮崎（17：15）　テントキーパー井村。

岩棚を整理して、指導標用の木わくをつくり、デポしておく。

8月30日　晴後曇　　BC発（7：00）—現場（10：16）　現場発（12：20）—BC着（13：00）　BC発（13：25）—現場着（14：25）—作業終了（18：05）—BC着（19：02）

宮崎氏下山。井村は体の具合悪く、宮崎氏と共に下山。作業は割合早く終えることができた。あとは指導標本体を入れるのみとなる。レリーフは設計図通りに入れるとかくれてしまう故、右横につけることにした。夜は歌などをうたいさわぐ。

8月31日　晴後曇後晴　　BC発（8：43）—BC着、坂東、阪本（16：36）高橋、吉村はケルンを調査。

村上東栂枝氏、村上明義氏、親戚の方3名（村上英夫氏、村上忠氏、村上勉氏）、畠中部長、キャンプイン。始めの予定では明義氏と3氏が現場まで行くはずであったが、全員登れるとのことで全員唐松荘入り。夜は10度位まで下った。月夜となり、山がくっきり浮き出す。我々の料理で全員山荘で夕食をとる。食後は歓談。

9月1日　曇後雨　　山荘発、村上英夫氏残留（7：11）—現場着（8：45）—現場発（9：05）—山荘着（10：25）

一村上氏、畠中部長、八方尾根下山、坂東、阪本見送り（12：30）。百瀬、保野、宮本、荒川に合流（13：03）—BC着（14：27）

あいにく天気くずれるが出発となる。唐松頂上附近からガスリ始める。現場では、線香をあげ全員黙禱。矢をとばす。今日中に八方尾根を下るとかで、もう一泊すすめたが無理だった。途中、雪渓の残っている上部で、百瀬、保野、宮本（百瀬氏の友人）、荒川各氏に出合う。坂東はそのまま一行と八方を下る。久しぶりにテントはにぎやかとなる。

9月2日　ガス　　BC発（9：07）—現場（9：58）—作業終了（11：10）—荒川、高橋（俊）BCへ、他は一峰まで散歩（11：40）—BC着(13：19)高橋、吉村、八方尾根下山（14：13）

指導標を入れるのに天候待ちする。晴れそうになく作業にかかることにする。作業終了後、「もしかある日」「静かな夜ふけに」をうたう。テントに着くと、坂東と佐村氏（泉君の同級生）が入っている。急にテントの食事がよくなった。

9月3日　ガス　　BC発（10：15）—現場（11：15）—現場発（13：05）—斉藤、伊藤、吉永各氏に出合う（13：30）。3氏と坂東、阪本現場着（16：15）—BC着

磁石をセメントでぬり込む。帰幕中、3氏に会う。百瀬、宮本はガソリンと酒買いに国宿舎まで行く。夜は楽しい団らんの一時をすごす。

9月4日　曇後雨　　斉藤、吉永、阪本を除き、他は八方尾根下山（20：50）。田村、高橋（洵）OB、BC入り（16：00）

昨日までにぎやかだったテントも火を消したようだ。下山組に大型テント、食器などをおろしてもらう。昼寝をしているうちに、OB二氏が来る。夜おそくまで語りあかす。

9月5日　晴後曇　　BC撤収（9：10）—現場着（10：45）—天狗のコル（12：40）—不帰沢へ下る（12：53）—奥の二股附近（18：15）

下山路を不帰沢にとる。信州側は、視界4mのガス。見通しがきかず。最初の草付きまじりのガレを15m程下ったところでブッシュをピンとしアプザイレン。そこより左岸方面に向い、30mトラバース。落石はげしく、万一を期して、あまりききそうにない岩にハーケンを打ち、ザイルフィックス。40mで雪渓に出る。そこから奥の二股まで、ザイル工作20回位、途中に大きなクレバスがあって、左岸の岩壁におり、再び雪渓上に出る。

9月6日　晴後曇　　テント撤収、出発（9：10）—南股の広河原に出る（15：30）—ダンプ同乗（17：52）—四ツ谷駅（18：08）

奥の二股より下方は雪渓なく、完全な沢下りとなる。雌滝についたのが11：10。右岸を滝下に出る。雄滝着12：00。ここは滝上方の大石にすてなわをかけて、下のつるつるしたテラスに15m懸垂下降。そこから右岸側のバンド（40m位）の壁をトラバースする、20m（14：00）。ここより南股の広河原までに、カンカンに凍った雪渓のブロックが一ケ所あったのみ。

〔阪本記〕

寛　彦　の　思　い　出

父　坂　東　久　平

寛彦は昭和十七年二月二十六日、決戦体制の緊迫したあわただしい雰囲気のさ中に生まれた。国を挙げて極めて不自由な生活の中で育ったわけですが、明るい性格でユーモアなところもあったので「ひろちゃん」の愛称でみんなから可愛がられて大きくなった。祖母や両親も、あれこれと忙しく、育児についても兄たちの時よりも手が届きかねる事情であった。しかし、そのことが生活のちえを生み、何事も自分で工夫し、気づいたことは直ぐ実行する良い習慣が身についたように思われる。

三才の頃でした。戦局はいよいよ熾烈となり、敵機の来襲も頻繁で、空襲警報が発令されると、庭につくってあった防空壕に避難した。或る日、大雨の後で一ぱい水の溜った防空壕へ落ちこんだ寛彦の姿が一瞬見えなくなった。幸にも近くにいた私が見届けることが出来たので直ぐ引き上げたが、あの時発見がおくれていたら、小さい命は、消えていたと思われ、生と死は誠に紙一重の感で慄然となる。

昭和二十年四月、私は学校長から県視学へ転任したので一層忙しくなり、出張が多く留守勝となった。七月四日の未明には徳島市が空襲され、中心部の大部分が全焼した。この時家族六名は、防空壕の中で無気味な焼夷弾の落下音や燃えひろがる火災を見聞した。女と子供を家財と共に危険の少ない山地へ避難させ、後顧の憂なくご奉公を――と決心し、荷造りを急いだが、不在勝で準備が進捗せず、そのうちに終戦となった。家族が転居していたら戦後の生活は一段と複雑、難渋となっていたものと思われる。

家族は揃って音楽好きなので、時局にちなんだ歌や軍歌、寮歌などをよく口ずさんだ。寛彦のカタコト（幼児語）の歌声が今も脳裡に残っている。

中学生の頃から、石を集めたり、古墳めぐりをしたり、考古学的資料に関心を抱くようになり、大学へ進んでからは寺院へよく詣で仏像についても熱心に研究していた。これは担当の先生の感化が大きかったものと思う。

長男が同志社大学、次男が京都大学、更に寛彦も京都の予備校へ参ったので、次々と八年間、銀閣寺に近い同じ下宿でお世話になった。私は出張の都度下宿へ立寄っていたので数多くの思い出があり、共通の話題が豊富で楽しかった。

寛彦の大学進学は、大阪市大の文学部史学科と大阪外語大の中国語科が合格したので二者択一となったが、第一志望だった大阪外語大へ入学した。人生のコースは奇しきものであると思う。寛彦が大きい夢を抱き、関心を深めていた中国との修交の窓口がやっと開かれた今日、寛彦健在であったら――と一入感慨深いものがある。

大学生活を偲ぶ資料は、書籍類のほかは殆んど山岳部関係のものである。休暇にはカラー写真やスライドで、よく話してくれ、とても楽しそうであった。山登りの状況はその都度連絡があった。「どうぞ全員無事故で下山してほしいもの――」といつも祈念していた。一度、アルプス登

山の時転落して下腹部を強打し、血尿の出る症状で帰郷した。幸に健康に復したのでホッとした思いであった。

村上泉さんのご遭難は哀悼の極みであって何とも筆舌では尽くすことが出来ない。寛彦の傷心の様子は今もなお眼前に浮んで来る。山岳部員の方々の真心で記会碑が建てられた時の感懐を偲ぶと瞼があつくなって来る。

山登りの楽しさと苦しみ——山岳部の真価の一端でも理解してもらいたい——の一念だったのだろう。昭和三十九年八月、寛彦は四国の霊峰剣山（１９５５メートル）へ私を誘った。還暦に近い父が剣山へ同行出来るであろうか——との懸念もあったらしく、先づ中津峰（７７３メートル）へ案内した。中津峰へは中学生だった妹も加えた三人で、一日の行程で登った。登山は久しぶりだったが、登山靴、リュックサック、山岳炊飯という本格的なもので、快適であった。この試錬にパスしたので自信を深め、一泊二日の剣山登りを決行した。私としては二十数年ぶりの剣山であったが、登山服装で小雨をついての強行登山へ勇敢に挑戦したわけである。周到にして細心、慎重な足どりで、踏みしめ　山頂へ向った。したたる汗も痛快であり、山頂に到るまでの苦労、頂上の素晴しい景観、一瞬にして一間先も見えなくなる霧の流れ……大自然の中での醍醐味は平地では到底体験出来ぬものであった。山頂のヒユッテで宿泊し、かなり強い風と雨を耳にしながら、寛彦自慢の山岳炊飯を満喫した。翌日は晴天に恵まれコースをかえて祖谷渓（いやけ）へ下り、かずら橋などを愛でて夕方帰宅した。かなりの強行日程であったが、親子は大悦びであった。大阪外大山岳部の自信と誇りをもって父親を案内、啓蒙した寛彦の胸中は嘗かし満たされていたことと思われる。当時のカラー写真はよき思い出となっている。

私が寛彦の下宿を訪問したのは昭和四十一年十一月が最後となった。卒業も間近であり、就職先も内定していたので楽しい夕食を共にして、東京行の車窓からは、やがて就職する会社を確認出来たので、胸おどらせて旅立ったわけである。しかし、翌四十二年一月二十二日、すべては無となってしまった。

大学における山岳部員としての活動を続け幾多の試錬を克服して来た寛彦が、郷里の平地で不慮の災厄に遭い二十五才で急逝したことは誠に遺憾なことである。お世話になった方々にも、また、社会に対しても、何もおむくい出来ないで逝去したことは、本人も残念だったと思われる。

命がけの真心で結ばれた山岳部の方々の生前におけるご厚情、葬儀に際しての数々の有難いご高配、それから今日に至るまでのお心づくしは、本人ばかりでなく私たち遺族一同深く感銘いたしており、お礼の申し上げようもございません。皆様のご発展をお祈りし、今後もよろしくお願申し上げます。

思　い　出　の　記

—— 寛彦松。ヒロちゃん道路 ——　　母　永　記　子

全く思いがけぬ急逝に、ぼう然とした月日を過ごしました。が皆様方のご親切と、自分で自分

をはげまして、どうにか今日まで来ております。大阪外大山岳部の皆様方からのご連絡をその都度頂きますので、在世中の通り話しかけてお供えしております。この度も寛彦のことをお心に留めて頂き、思い出を載せて下さるとのご厚意に深く感謝しております。

寛彦は昭和十七年二月二十六日、徳島市大谷町紅葉山で私たちの三男として生まれました。紅葉山は三方山に囲まれ、東南に開けた段丘の地型で天保の頃阿波の播主、蜂須賀重喜公（十一代）の隠居屋敷のありました所です。土地の人たちは、お庭と呼んでおります。平和な環境ですが、第二次世界大戦は、寛彦の三才まで続きました。戦時中は祖母に抱かれて防空壕の中で、昼食をとったり、二人の兄の古着と、再製品で大きくなったと云へるほどの耐乏生活でした。この様な生活の中でありましたが、のびのびとほがらかに成長して行きました。近所のおばさんや、お友だちからは、「ひろちゃん、ひろちゃん」と愛称され過ごして来ました。三四才の頃かと思いますが、戸棚の奥にしまってありました、私の学生の頃作った、赤い裏のついた、一つ身の袷を着せたことがありましたが、それを思い出したのでしようか、「ぼくが小さい時、女子（女の子と云えず、オンナコ）であった時に……」など……。家族の者も、可愛いさにその後は、オヒロサン、の愛称で呼びました。次兄など今でも「オヒロがどうして、こうして」と、オヒロサンの徹底ぶりは、大したもので、又家族たちと、何の抵抗と感じず、在世中の寛彦も、平気で返事をしておりました。或る日近所のおばさんに「ぼくのとし、知っとるで（知っていますかと云う方言）」、「ひろちゃん六ツだろ」「ちがうの、ぼくのとしシックス」、この会話は今も思い出されると、近所の人たちは、話してくれます。ローマ字や英語の流行していた時ですし、カルタや、兄たちに聞いていたのでしよう。又戦線の事など、壁に貼ってあった世界地図を兄たちに教はり、南方のチモール島までも覚えて、背のびしながら指さしていた姿が、今も目前に浮んで来ます。寛彦は家族の中の人気者でもありました。来客のあった時には、「ぼく、こんにちは、云ってこようか」と必ず言っておりました。小学校入学の時には、父への配給の、サージで学童服を作りました。各学年通じ首席で通しました。卒業の時市教育委員会から卒業記念のアルバムを頂戴し、卒業生を代表して、答辞も読みました。中学校は、徳大付属中学に通いました。五粁余を自転車で通学し、又県立城南高校時代も、高校生活をたのしく満喫した様です。中学三年の運動会には、姿三四郎になり、絣の着物に父の袴、荷物を肩に打掛け、角帽姿。高校時代にも、秋の城南祭に、コント、「壺坂お里沢市」をもぢり、「おとさ、わさ市」と名付けた寸劇に、わさ市を演じ、妹の赤い帽子を、切ったり、衣類に小切れを綴りつけたり、家族総動員で、作りました。中学の頃から、考古学的な事に興味を持ちはじめて、社会科の先生や、お友だちと古寺巡りを楽しむ様になり、古瓦や、刀のかけらなど、集めておりました。

家庭的な子でして、私たちにもやさしく、よく気がつくし、人の気をよく汲みました。或時私は、「寛彦は、どうしてあんなに、かしこいのだろう」と、つくづく話したことが、今になって若死と結びつくのでございます。夏休みには庭木の手入れや、植木を楽しみ、草花もいろいろ珍らしいものを、植えたり、又徳島の名石である梅林石など、わざわざ自転車で二十粁もある川辺まで拾いに行きました。今では思い出の石として小さいものまで全部保管しております。又兄た

ちと高知県西南にある、足摺岬、見残しの海岸、竜串海岸などへ釣道具を持って行き、底まで澄んだ、きれいな海中の魚類と楽しく遊び、或時はお友だちと、四国一周のペダルをふんで、計画の不備から、土地の人たちの四輪車で運んでもらって、高知の人たちの親切心をよろこんでみたり、とにかく子供らしさ、若者らしさに、ほのぼのしたものを感じていました。

大学一年の春休みの時かと思はれますが、裏山から松の若木を四五本掘り、庭前に植えてあります。この木が、今思い出の木になるなど思いがけませんでした。私はこれに、寛彦松、と名づけて、手入れをし、又根本にお酒をふりかけ、害虫から守り、寛彦の化身として、成長を楽しんでおります。

大学二年の時、体をこわし入院治療したことがありました。退院後、家で静養の時、庭に通路用の石を敷きつめて道をこしらえ、両側に高麗芝を所々に植付けました。今、その芝は大へん広くはびこり、敷石の上にまでもおおいかぶさって、元気そのまゝの色と、姿をしております。お隣りのおばあさんが、「ひろちゃん道路」と、名づけてくれました。私方へ来られた時には、必ず、寛彦を思い出して下さるそうです。

「これからの日本は、中国と仲よくせねばいけないから、ぼくは中国語を選ぶ」と云って、大阪外語大学中国語科に学んだのでした。昨今の情勢を見て、寛彦の眼の正しかったことを思う時、若し在世ならば、今頃は……など、ふっと思うとき、残念でたまりません。

若くして世を去った寛彦を忘れることなく永く残しておきたいと思い、先祖たちの五輪塔と、私たち両親の墓碑の横に、墓を作り、何時々々までも、ねんごろに供養してやりたく念願している次第でございます。

一昨年寛彦の戒名、淳聖修広信士、と認め札ばさみに入れまして、四国八十八ケ所を、巡礼姿で巡拝して参りました。在世中友だちと一周したであろう道路も坂道にも、心の中で寛彦に話しかけながら、乗用車で参りました。途中高知県の東部の坂道を、高校生らしい男子三四人がペダルをふんで行くのを、追いつ、追はれつして行った時にも、寛彦に結びつけてしまい、寛彦の姿に見えました。高知県室戸岬にある東寺（最御崎寺）から打出して行き、香川県善通寺にお詣りしました時、納経所の白髪の老人が、何を思ったのか私の白衣に宝印の後、あじろ笠に杖を持たれた、弘法大師様のお姿を小さく墨で書いて下さり、同行二人と横に認めて下さったのでした。ご一緒していた三人が、「きっと寛ちやんがついていたことを、お大師様が御存じなんだ、これはお大師様がお書きになったのですよ」と云ってくれました。とてもうれしく又、不思議に思っています。

外大在学中には、私を奈良、京都での、寛彦の好きな所を案内してくれました。殊に奈良では、戒檀院を訪ね、四天王を見せてくれました。「ぼくがどんな仏像に興味を持っているかを見せて上げる」と云っていました。京都では名のある寺院、庭なども沢山案内してくれました。おかげで視野が広くなって、うれしく思いましたのか、早くも思い出の一コマになっております。

室津一男君の勉強のお手伝いしておりましたが、「ぼくは事務的な教え方などしたくない。知っていることは出来るだけ話してやり、現地につれて行って教えてやっている」と云って、妹章

子も、万葉の大和路とか、ミロのビーナス展、フランス展、エヂプト展などへ連れて行きました。私も同行し観賞する機会を作ってくれました。

妹章子が、大学入試の時には、寛彦に代って、保野様、阪本様が親身になってお世話下さり、不知案内の地でも、安心して受験出来ましたことも忘れられない思い出でございます。

次兄邦彦の長女は徳島で生まれ、勤務地釧路へ帰る時、航空便でしたので、寛彦が送って行きました。その時網走の阪本公博様ご両親を訪ね、その後妹章子が北海道の兄の所へ行った時も又、私が釧路の邦彦の所に遊んだ時にも、網走に阪本様ご両親をお訪ねしご歓待を受けたこと、又阪本様御母上様も私方へ来られて、墓参して下さったことも大きな思い出になっております。又私が知床に行き、酋長の店に立ちよった時、奥様から寛彦をしのんで下さったことも又、一つの思い出です。次兄と二人で知床ウトロの町まで足をのばしていて、酋長の奥さんから、言葉をかけて下さった時には、云いようのないうれしさと悲しさで一ぱいでした。

私が東京から日光、碓井峠を過ぎ、浅間温泉に泊った時、塩尻の村上泉様のお母上様がわざわざお訪ね下さり、旧友のような気持ちで夜更けまで話込んだこと、又一昨年夏、章子も村上様を塩尻に訪問し、ぶどう狩りを楽しませて下さったことも寛彦のおかげと思います。毎年村上様はリンゴ箱詰を、又私方はみかん一箱を、お供物として交換し、子供たちを通じ、心と心のつながりを楽しんでおります。泉様も、寛彦も、体は見えなくなりましたが、霊は生きております。こうして私たちは息子に代って、ご交際をつゞけております。室津様も今もなほお供物などお届け下さいまして感謝いたしております。

私は、沢山の思い出が心にとけこんで、その時に、なつかしく又、かなしく、糸のように次々と繰出されて来ます。これは私の一生を通じて変らぬものと思っております。

先祖や小さい時から育んでもらった祖母、曾祖母たちの下で安らかに、又楽しい時を、過ごしながら私たちを見守ってくれていると、確信しております。

私たち残された者たちは、朝夕ねんごろに読経と香花を供え、墓参に浄行にはげみ、慰め供養して、菩提をとむらっております。

寛彦は短い人生でありましたが、いろんなことをして、親を思い、妹に教え、兄たちにもそれぞれ誠意をつくし、友だちにも恵まれました。思い返してみますと、神業かとも思うほど、不思議なことがございます。寛彦の霊は永劫に光り、人それぞれに何ものかを知らせてくれると思っております。

人生は短く、真心は永し。の感がしみじみいたします。

思い出を辿って書き綴りました。次から次へと、お恥しさも忘れて書きました。在りし日の寛彦と話をしている錯覚をおぼえます。

思いがけないこのご計画に、加えて頂き、天上の寛彦は、大変よろこんでくれていることゝ存じます。

私も昨今心も落ちつき、寛彦から学んだ事を基にして、郷土文化財めぐりと、古文書入門、短歌などに心をうち込んでおりますので、他事乍ら御安心下さいませ。

大阪外語大学山岳部のご発展と、部員皆様のご健斗と、先輩の方々のご多幸を、お祈りしてペンを止めさせて頂きます。

どうもありがとうございました。

泉のように思っていた坂東さん

村上　東栂枝

急にこの世から消えて了った坂東さん。「おばちゃん又来ました。ハハハ……」と玄関で笑っている姿。急に来ては驚かされたり、前から知らされて、泉でも帰って来るようにうれしく楽しみに待っていたのに、もう二度と泉のように私の前に現れなくなって了いました。人の命のはかなさを痛感せずにはいられません。

一歩一歩と全神経を集中し乍ら進んだ積りでいたでしよう泉。危険な登山を何度も経験済みのしっかりした足であった筈の坂東さん。共に信じられない程の早さで転落して了いました。

泉の代りの息子となってくれて、私を喜ばせてくれた坂東さんをいい事にして私も息子のように可愛く、明ちやんも弟のようだと喜び、家へ来てくれたと話せば私のうれしそうな顔をみて喜こんでくれたのにもう其の喜びもない。御両親様をはじめ御兄妹様達の悲しみは如何ばかりかと御察しするたびにとめどもなく泣けて来ます。三年前の悲しい思いが痛い程に私の胸に通じて来ます。

去年八月、泉の慰霊碑を建立して下さった時、馴れない私達を手を取るようにして苦しいなかをよく気を使って現場まで連れて行って下さったのには頭のさがる思いでした。「念願を果すことが出来てよかった。心配だったおばさんが登ってくれた事が何よりうれしかった。」とよろこんでほっとして話した頭が目に浮かんでまいります。

十月には、突然保野さんと二人で私の家へ来ましたね。日曜日の朝5時半頃着いたのに、せっかくの休みの朝ゆっくりねているおばさんを起しては申訳けないといって裏にあった自転車で寒い町を二人で一廻りして来たとか、思い掛けない来客で吃驚したり、喜んだり、私と三人で其の日は快晴に恵まれた高ボッチへ行ったのが最後となって了いました。忘れた頃に北海道から絵葉書が来て又驚かされ、その後北海道へ義姉と赤ちやんを送って行って来たとの知らせ、手紙とこの時が最後となりました。往きの飛行機と違い、帰りの汽車は、「遠い遠い、実に遠い……」と書いてありましたけれど、二ケ月後には遠い遠い本当に遠いところへ行って了いました。

吃驚させない積りだったのか、年賀状には、「今度は突然に……なんてことはやめにして、前に知らせる事にします。」と書いてありましたが、約束を違えて突然に、それこそ突然に亡くなって了い、嘘のようで信じられませんでした。

学校が始まれば、四五日してきっと葉書をくれたのに、十二月からずっと音沙汰なしでどうしているのかしらと心配になり、手紙をだそうかと思ったのですが、試験もあり、卒業をひかえて忙しいでしようし、迷惑になればと遠慮してとうとう二十日近くにだしたのですが間に合って見

てくれたのか、見ないで亡くなったのかその返事を頂かないままに終って了いました。残念なことです。後でゆっくり返事でもだそうと思っている内に事故に合ったのですね。そう思っています。いよいよ卒業してこれからとはりきっていたでしょうに、くやしかったでしょうね。

今頃泉のところへ行って、楽しかったこと、苦しかったことなどどっさり背負って行って、出しても出しても尽きることのないお土産話を二人でしていることでしょう。

仏壇の泉の写真と並んで坂東さんの写真も飾って朝夕冥福を祈っております。どうぞ安心して成仏して下さい。

四十二年三月一日

〔故村上泉君御母堂〕

遭難対策基金について

万が一、部員が遭難した時のために、我が部では今年より全員が関西学生山岳連盟を通じて山岳保険（1年掛け捨て）に加入している。

これとは別に、部には遭難対策基金というものがある。これは坂東寛彦先輩が亡くなられた折に厳父より山岳部に寄附された五万円を、まさかの時のために定期預金にして歴代部長に保管していただいているものである。以下に坂東氏の御寄付に当っての御挨拶と畠中部長のそれに対する謝辞を再録する。

謹啓

先般寛彦の葬儀に際してはご多忙にも拘わりませず御会葬頂き、また、弔電弔文を通じて御懇篤なる御弔慰を賜わり、その上過文の御高配を辱うし、誠に有難く厚くお礼申し上げます。（中略）

就職先も内定し、社会人として巣立つ日を目前にしながら不幸災厄に遭い、御懇情を賜わりました方々に対しまして何のおむくいも出来ませずに他界いたしましたことは、さぞかし残念であったことと思われます。ここに生前のご温情を深く感謝申し上げます。

なお、このたび皆様から賜わりましたご厚志に対するお礼に代えまして、学生生活だけで終ってしまった故人の心情を汲み、頂戴いたしましたものは、母校の方上小学校と大阪外国語大学山岳部へ勝手ながら寄附させて頂くことにいたしました。何卒ご了承下さいますようお願い申し上げます。

早速参上いたしましてご厚礼申し上げるべきでございますが、先づは寸書をもちましてご挨拶申し上げます。　敬具

昭和四十二年二月

父　坂　東　　九　平

父　坂　東　　九　平
母　坂　東　　　澄
兄　坂　東　　克　彦
兄　坂　東　　邦　彦

大阪外国語大学山岳部様

——— 御寄附に対する部長謝辞 ———

坂東寛彦君は、その誠実のある人柄、温厚でしかも内に毅然たるものを持った挙措で誰からも愛せられ慕われて来た人であります。

同君は特にわが山岳部の充実と発展のために、本学入学以来学業のかたわら情熱と努力とを傾けられ、後には先頭に立って常に部員を率いて来られました。

それだけに、間近い卒業をひかえてのご急逝は、われわれとしても痛惜の言葉を知らないほどであります。

この度、ご不幸に対して寄せられた香資のうち、金五万円をわが山岳部に頂載しましたことは、誠に感謝に堪えません。（中略）

今回のご厚志のお心を最もよく生かし、部の一層の発展に役立つように使用させていただきたいと存じております。

くり返して故人のご冥福を念じ上げるとともに、心からの謝意を表明致します。

昭和四十二年二月十八日

大阪外国語大学教授
大阪外国語大学体育会山岳部部長
畠　中　　敏　郎

尚、昨年の新人歓迎コンパの事故の際に原部員の厳父より御寄附いただいた一万円を合わせ、十一月現在の残高は６５.１０１円である。他に畠中先生が御退官の際に寄附された一万円が普通預金にしてある。

〔編集部〕

亡き友をしのぶ

広　瀬　　州　男

私は、卒業して間もなく、村上君、坂東君と云うよき友を相ついでなくした。あれから十年に近い歳月が流れたが、今でも昨日のことのように思い出される。村上君とは、彼の最後の山行と

なった後立山に出かける大阪駅での見送りが、永遠の別れとなってしまった。汽車の窓ごしに、不帰の峡の注意をあれこれ語り、リーダーとしての彼に事故のないように云ったことが、かえって、彼に必要以上の緊張を強いる結果となったのではと、今でも残念に思えてならない。真面目な顔をして、私の一語一語に「ハイッ、ハイッ」とうなずいていた彼も、あれ以来となってしまった。

坂東君は、私の勤務する会社に就職が決っており、私も楽しみに彼の入社を待っていた。就職が決ってから、よく私の会社や、家に立ち寄り、社会人となってからも、二人で山へ行こうと、あれこれ山行プランを練ったものだ。十二月にも、「これから故郷へ帰ります。来年が楽しみですね」と云っていたし、年賀状にも、同じことが書かれていた。彼が生きていてくれれば、同じ職場で机を並べながら、山の話をし、連休にはそろって山に出かけたろうし、又、彼も得意の中国語を活かして、輸出部で張り切っているであろうと、思ってみたりしている。

両君については、まだ色々書き留めておきたいこともあるが、私のつたない文章よりも、人それぞれに、胸の奥底に想い出として残しておいた方がよいと思われるので、紙上をかりて、改めて、両君のめい福を祈ることにし、結びとしたい。　　合掌

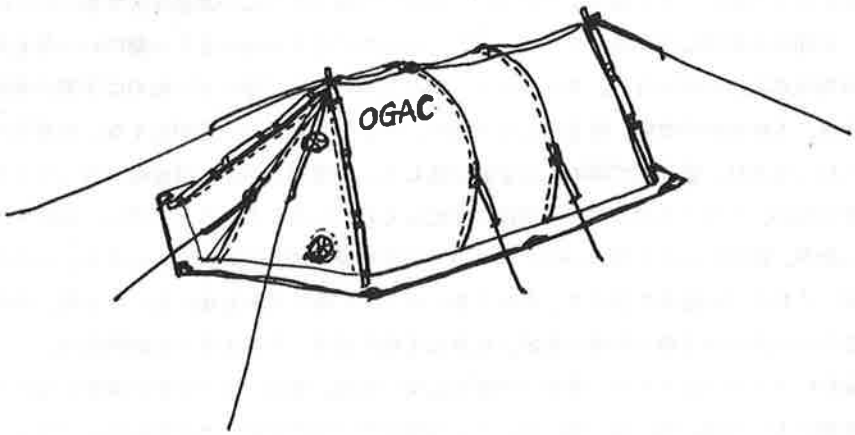
〔IN－38年卒〕

坂東君、村上君のこと

林　　茂　一

坂東君が山岳部に入部したのは、私が三回生の時だった。新人歓迎会の時、「四国の徳島の出です」ということで、私も両親が徳島の出である所からよく国の話を聞をされたものだった。少し気の弱いところがあったが暴れん坊の多い山岳部内ではおとなしい素直な男であった。山のことでは一年間私が指導したからトレーニングで六甲山など近くの山へよく一緒にいったものだった。その坂東君も、もう居ない。あれ程山でけがしない様にと注意していたのに下界の事故で亡くなるとは、人はわからない。腹立だしくもあり、さびしくもある。彼が亡くなった夜私は所用で徳島へ行っており、徳島駅で彼のことを思い出して、一度機会があれば徳島で会って見たいなと思っていたが、今頃大阪の下宿で卒業論文で忙しくしていることだろうと思い、徳島港から神戸に帰ったが、時間的には丁度その時、彼は近くの小松島港辺りに居たことになる。私が小松島港から帰っておれば小松島で会えて、あんな事に成らずに済んだかも知れない。通夜、葬儀、納棺、骨ひろいと済ませて神戸に帰ったが、化粧して棺に収まったお人形さんの様な顔、トレーニングの帰りにゴクゴクとサイダーをラッパ飲みしていた顔、部のコンパで赤い顔をしながらニコ、ニコ盃を傾けていた顔、顔、顔、顔、顔、そんな顔が今でも昨日のことの様に目にうかぶ。部内で一番仲の良かった村上君の所へ行ってしまったと考えるしか考えようがない。

村上君のこと。彼が山岳部に入って来たのは二回生に成ってからだった。久しぶりに部のトレーニングに出たら、見なれない男がいた。それが彼だった。いいかげん八方破れ的特色を身上としている外大生の中にもこんなまともな男が居たんだなと正直言って驚いた。それが彼の第一印象だった。紅顔の美少年の面影を少し残したトットとしべる品行方正な好青年であった。傍に居ると人間的にも感化を受ける所があった。山のことでは余り彼とは関りが無かったが、それでも時々「トレーニングに連れていって下ださい。」と電話をかけて来たことが有ったので、道場、芦屋のロックガーデンなどへ二人で行ったことがある。山から帰るとき、「おでんでも食べるか？」と云ったら、「食べましようか」など言いながら店屋のおでんのなべをのぞき込んでは皿に入れて来て、熱いのをフーフー吹きながら食べていたお袋思いの親孝行者、その彼を親不行者にしてしまった。普通の者が一生かかってする親孝行を二十余年でしてしまった彼、そう考えてもやり切れない。私が病院で入院していた時、あの山行に出発する前日、夜おそく病室に入って来て、ベットの端に腰掛けて上から私の顔をジットのぞき込んでいた。「どうしたんだ」と言ったら「いいや、何んでもありません」と言って、またジット私の顔をのぞき込んでいた。あの顔が眼底に焼き付いて離れない。「山では無理をするなよ」と言ったら「うん」と言って帰っていった。それが最後の別れだった。

坂東君、村上君、二人共居れば、良きにつけ、悪しきにつけ、一生の付合に成っていたものを、二人共、若く美しく行ってしまった。さびしい。

〔D－40年卒〕